

つて、深い興味を約束する所以のものは、是が我邦多數の純良なる地主諸君の、新らしい時世に對處する分別と苦心との一例だからである。今は何處にも在る話で珍らしくなく、従つてよほど子孫の爲に親切な者でない、筆にして殘さうとせぬであらうが、何しろ今のこの時代が平凡で無いのだから、永く傳はればきつと大きな參考になる。我々は寧ろ未來の史學者の理解を扶けるやうに、出来るだけ公平な仲介をして置く必要があるかと思ふ。東北農業の特色は、一般にやゝ誇張せられて居るかと思ふが、この日記などを讀んで見ると、業主は必ずしもそれを意識せず、終始全國の同じ地位境涯に在る人々と、相似たる行動に出ようと努力して居る。それが又明治以降の統一國家の、根本の政策にも合して居たのである。風土環境の現實の差異は、果してこの新たな生活體系に對して、どの位までの影響を與ふべきものであつたか。土地が東北であり雪深き鳥海山麓の向ふ側であるが爲に、今までどれだけの制約を受け、もしくはどれだけ餘分の利便を許されて居たか。この一個の最も具體的なる實例によつて、我々の導き得る教訓は小さくない。私は最近に菅江

眞澄の年譜を編まうとして、秋田叢書によつてもう一度、「月の出羽路」の全巻を通讀して見た。佐竹侯の入部を堺にして、この地方の開発は大飛躍をして居る。村々の舊家と稱する者の先祖は、多くは若干の智能資力を携へて、新たに山阪を越えて入つて來た人々である。それが尋常の商人地主とちがふのは、彼等自らも亦子弟僕従と共に、ひどい忍苦を以て草萊と闘ひ續けて居る。手足の爪先から腹の底まで、農夫になりきれぬ者は住んで居ることが出来なかつた。しかも他の一方にはたゞ單純なる勞働ばかりでは、突き破り得ない難關も、始めから聳えて居たのである。萩澤新田がたつた一つの例外で無からうと思ふが、爰には家畜を立てるだけの草野が無く、麥大豆を作るまでの乾田もなく、その上に更に燃料が足りなかつた。僅かなカクマを刈り杉葉を集める外は、正式の煮物ふかし物にはすべて買入れの薪を使つて居る。器具建築の資材などの、外部の供給が當てであつたことは言ふまでも無い。即ち最初から自給經濟は思ひ切つて、いはゆる町立ちが生活の一部に織込まれて居た土地である。雄物の水運が沈黙の援助者であつて、暮には何俵かのカドや



ハタハタが、ひとりでに爐端に居くものゝ如く、思つて居た者もあるか知らぬが、是と米一色の農業とを結び付けたのは、やはり隠れたる村人の商才であつた。思慮に長じた若干が此間に崛起して、夙に優勝の地位を占めたのも已むを得なかつた。言はゞ中央部の年久しい農部落よりも、一段と競争の激しい土地だつたのである。東北の自然に培はれた平和主義、乃至は固有の運命觀と、この新たな文化の刺戟とは、今もまだ完全には調和して居ない。如何にそれを導いたら、樂々と次の樂土に入つて行けるであらうか。御互ひに取つては誠に苦しい課題であるが、しかも一面にはこの新舊感覺の交錯、古風と改革との繼合せの中からも、なほ幾多の詩趣史情を、掬み上げずには居られない。何の街ふところも無いたゞ一軒の家の記録ではあるが、今ある東北の生活相が、之を透して或程度までは窺はるゝのみならず、見様によつて是が又、大きな日本の縮圖とも言はれぬことは無いのである。

さて少しく勝手なことを言ひ過ぎ、何やら人の午夢で法事をしたやうな嫌ひがある。今

度は尋常に此書物の面白かつた點を列挙して、御挨拶の言葉に代へようと思ふ。一ばんこの地方で重要な問題は水利であらう。其爲に發達した制度慣例は、古く開けた地方にも手本になるほど、綿密で又嚴重なものらしいが、さうなつた原因は山の樹を伐り過ぎて、水の手が細くなつただけで無く、一つには情性に曳かれた際限も無い水田の擴張からだと思ふ。利害を超越した菊池喜榮治君のやうな人の研究が、早く総合せられることを私たちは待つて居るが、その結論を實施に移すとなると、又きつと其次の問題に打付かるであらう。佐藤家歴世の日記の中には、當然に之に對する憂慮と畫策の記事が多い。さうして屢々又一部の解決には成功して居るやうである。數字ばかりを氣にした官邊の報告類よりも、斯ういふ小さな消息が將來のよい資料になるのだが、如何にも東北的だと私などが感ずるのは、この辨護士にも呑込めぬ様な、細密極まる規約と併行して、別に雨乞と御果たしとの行事が、いつも盛大にくり返されて居ることである。雨さへ降つてしまへば問題はたしかに片付くが、其代りには翌年も亦雨乞を企てなければならぬ。さうして山の龍王の信仰は



年と共に少しづつ後退して行かうとして居るのである。

しかもこの信仰の強みのまだ残つて居るといふことは、どのくらゐ人心の萎縮を防いで居るか、測定も出来ないほど大きいものだつた。定義も範圍もきめないで迷信を打破しようとしたり、さうで無いまでも白眼に人の所行を眺める者が多くなつて、今や農民の心理は動搖し始めて居る。ところがこの地方の信仰生活は、さう強烈なもので無かつた代りにいはゆるインテリ層の除外例が今までは無かつた。年が少しでも好ければ率先して、踊を催したり梵天を奉納したりしたが、日記の中には何度でも見えて居る。まことになつかしい仕來りだと思ふ。御寺との附合ひなども、幾分か他の地方とはちがつて居るやうである。いつ頃から入込んだ眞宗か知らぬが、本山の方では格別力も盡さぬのに、土地からの歸依は純一なもので、京參りを一生の願望として居る様子はしほらしい。寺へ元日に禮に行くことも、私などには始めての例だし、御師隨と稱して法事に招いた僧を、送つて行く作法も珍らしい。東北地方の眞宗門徒には、是が弘く行はれて居るものであらうか。斯

ういふ序を以て知つて置きたいと思ふ。

恐らく此家だけの家風といふのは少ないであらうが、年中行事の中にも私などには注意せられるものがある。たとへば田植の終りに村一同で休む大サノボリに對して、家限りで催す祝宴を此邊ではヨテナメと謂ふ。是は地方によつては家サノボリといふものに該當し多分はヨテナメの發音變化であらう。冬は新曆十二月の始め頃に、荷繩はづしといふ働き人への饗應があるが、この荷繩は人の背に用ゐるもので、乃ち刈稻搬入を以て、農作勞務の終りとした古い習はしに基づく名であつた。しかも是から北の方へ行くと、春の雪解け後に田を打つのが普通であるに反して、このあたりでは稻刈直後の秋田打ちがある。盆の煤掃きといふことも常例の一つになつて居るが、關東以南の土地では少ないやうで、多分は春遅くまで爐の火を焚くことゝ關係があるだらう。それよりも我々に珍らしいのは盆の獅子舞、是も東北の人はあたり前だといふだらうが、實際には此伎藝の由來を明かにする上に、可なり大事な資料なのである。新年の行事の比較的簡略なのは、或は維新の動亂な



どの際に、既に取罷めになつたものが多い爲であらうか。とにかく爰には小正月の皐月祝の稻穂飾りも無く、カセドリ・シヨトメが遣つて来た記事も無く、又初山の日のヌサ掛け鴉喚びの行事も見えない。或はあつても無視せられて居るのかも知れぬが、鎌倉焼きだけは毎年必ず、大きな木を伐つて来て立てたことが書いてある。乃ち町で見るやうな雪室が中心では無くて、よほど又中央部のトンドや左義長と近いのである。

この日記の中の大事件としては、明治二十年の優曇華の奇瑞、又は石打ちの恠談などもあるが、それも是も時代と土地との空氣、それにとつぷりと浸されて居た家族群の生活を透して、始めて其感動の深さが窺はれる。殊に數篇の旅行記の面白さは、世間をこの平和な一家庭と繋ぎ合せた、美しい飾り紐のやうな役をして居る。あの頃の日本は斯うであつたといふよりも、斯ういふ人たちも旅をして、深い印象を得て居たといふ點に、一段と新鮮なる歴史の興味がある。私は少年の頃下谷に居て、しばし街上に出て東北の旅客の、三々五々と過ぎて行くのを見た。國はどこだらう、故郷はどんな土地かと、空想を馳せた

こともまだ覚えて居る。それが突如としてこの日記の中から、あれは私だよと近づいて來られたやうな、昔なつかしさを感ぜずには居られぬ。爪じるしをした簡條も幾つかあるがあまり長くなるからたゞ一つだけを舉げると、平治翁の若い頃の旅日記に、箱根を越える路で足柄山はどの方角かと、頻りに案内者に聞いたとある。どうしてそれを尋ねたのかと不審に思つて居ると、後の追憶記の三瀬宿の條を讀んで、はつきりとその氣持がわかつたのである。翁の生父長左衛門君が二十一、母君が齡僅か十五の年に、今なら新婚旅行といふべき伊勢參宮の行戻りに、ひどい難儀な目に遭ひつづけたことがあつた。足柄山はまさに其序幕であつたのである。それからさきもなほ數々のうき苦勞を重ねて、漸う莊内領まで辿り付いたのが、もう冬のかよりであつた。ちやうどこの三瀬の路ばたの家に休むと、其家の老母が話を聴き、同情の餘りに我息子にいひ付けて、惱める若妻を背に負うて、山阪を越えて故郷の家まで送らせてくれた。其日のうれしさが忘れられなかつたのであらう。二十何年かの後に湯温海の湯治を兼ねて、この三瀬の家を訪ねて禮を述べた。老女は既に



世を去つて、その時の若者が爺になつて居たとあるから、昔の思ひ出話の盡きなかつたことも想像せられる。それを年少の藤渚翁は、傍に居てちつと聽いて居たのである。斯ういふ小説よりも美しい情味は、あの時代のものであり、又東北特有のものでもあつたかと思ふ。私などはたつた二つのこの様なしほらしい話を受感する爲にも、之を發生させ又保存して居た土地と家との長々しい記録を、讀み通した甲斐が有るやうに思つて居る。

いさゝか事を好んだ赤川君の介助によつて、私だけは偶然にこの一巻の家記に親しむことが出来たが、さて世間の多くの人が、今後之を讀んで同じやうな感激を、受けるかどうかは疑問である。しかしもし之を單なる一族の懷舊追憶の書たるに止まらしめず、少しでも人生社會の用に立てようといふ志をもつ人があるならば、藤澤歳時記には必ず索引を添へなければなるまい。さうしてなほ出来ることならば、この中に出て来る若干の大小人物の、時々風貌舉措を想ひ起させるやうな、よそ行きでない寫眞を挿んで置きたいものである。私の序文の如きは、是も自分だけの日記見たやうなもので、格別この本の利用には

役に立たぬであらうが、やはり我家だけにはいつ迄も残して置きたいと念じて居る。

(昭和十六年十一月十一日)

### 川口孫治郎著『日本鳥類生態學資料』

近年川口君は頻りに仕事を急ぎ、家に十日とは停まつて休息することも無く、文字どほりの北馬南船にも、いつも東京は素通りして、歸りには寄らうといふ便りだけがあつて、後に失望するのが常例のやうになつて居た。書面にしたゝめて出す様な用件でも無い爲に逢つたら濃茶でも啜りながら、ゆつくり話して見ようと思つて居たことがあつて、實はさういふ日の到來を期して居たのである。先づ第一には川口君の學問の風が、ほゞ世上に其意義を認められ、感化は既に同君の豫測しなかつた區域、たとへば私たちの携はつて居る



文化史の研究などにも及んで居ることを告げて、だからもう少しは憩はれてもよいと、いふことが説いて見たかつた。それから今一つは如何に境涯の恵まれた人でも、あらゆる種類の鳥獣の生活を、観察し盡すといふことは一生のうちには望まれない。それよりも大切なのは同じ心の日本人を多くすること、この態度と方法とを詳しく解説して、事業を永續するものにした方が得だといふことを、自他の爲に賛成してもらひたかつたのである。是に對する川口氏の返答も、一應は想像できぬことは無い。そんなことを言つた所で、自分と均しい熱情を以て、この仕事を分擔しようといふ人が、有るやら無いやらは不定である。さういふうちにも鳥は居なくなり、獸は現に足跡も稀になつて居る。居つても生き方が元の通りで無いかも知れない。機會がある以上はそれを逸して、宛て無しに人に任せては置けぬ、といふ氣持は慥かに有つたらしい上に、内心に或はなに其位の仕事なら、一生かゝれば爲し遂げられぬとも限らぬといふ、樂觀があつたのかも知れぬ。少なくとも外部の者からは、さうも取れるほどの活躍ぶりであつた。それがやつぱり無理であつたといふことは

此頃になつて漸く判明したけれども、今ではもう参考にも何にもならない。

獵や農藝の如き昔からの勞作でも、専心に之に携はる者には「はづみ」があり、調子があり、又忘我の境とも名づくべきものがあつた。疲れと倦怠とが區切りを付けぬ限り、中途で向きを替へて別の用を、片づける氣にはなれるもので無い、まして學者が新たなる野外の作業にはまり込んだ場合、興味は次から次へ止めども無く誘引しようとする。それをしたから思ふ様に、自由に加減し得なかつたのに不思議はない。さうして川口君は實によく働いたけれども、まだ些しでも疲勞といふものは感じて居なかつた。たゞ人生の暮色が餘りにも速かに、蒼然と押迫つて來たゞけである。是に對しての内心の慌たゞしさは、經驗して居る者が世間には多いことと思ふ。私は必ずしも川口君に向つて、退いて靜かに書を著したまへと、勸説したことはないつもりだが、以前は稀に出逢ふとよく著述の話が出た。御互に此問題の未解決が、日増しに氣になつて來る年齢に達して居たからである。川口氏の計畫は可なり大がゞりなものであつた。しかも其完成にはあの點この點、もう一



度詳しく観測して來なければならぬ部分がまだ幾つかあると聽いて、私は窃かに歎息したのである。古來さういふ深切な志を懐きながら、年頃の收穫を一つも同胞に頒ち得ず、去つた人が多いからである。現に我々の目前にも、生涯の刻苦精勵を空な未知數に、還元しようとする學者が幾人もある。惜んで間に合ふうちに惜まなければうそだと思つた。假に時代を提擲する様な總論要約の書は書けなくとも、少なくともこの自然觀察の態度と方法順序、殊にこの熱情は世に傳へなければならぬのだが、是が結局は又有りふれたる人生の不可能事に歸して、たゞ徒らに一部の世を同じうする者の、禮讚の聲となつて終るのではないか、といふ様な懸念が私には制しきれなかつた。

本書の出現は、まさしく其懸念が一個の杞憂に過ぎなかつたことを證明する。著者の思ひがけぬ病氣は悲しいけれども、ちゃんとは是だけの大著がもう準備せられて居たのであつたら、別に何も言ふ所は無かつたのである。あの忙はしい旅行生活に於て、いつの間にもこの支度が出来たのかと、一應は誰しも驚かすには居られぬが、實は川口君には私たちもよ

く知つて居る、非常に結構な慣習が一つあつたのである。どんな疲れた晩の眞夜中でも、寢る前には必ず其日の見聞を筆記して、旅先ならばすぐに郵便で家へ送り付ける。それが音信ともなれば又綴ぢ合せて本にもなる様に、久しい間同じ型の紙を用ゐて居た。前年私を訪ねて行つた頃にも、是が財産だと言つてもう數十冊はたまつて居た。あれから又大旅行が続いたので、きつと數倍に増加して居ることと思ふ。讀みたければ持つて行けとも言はれたが、紛失が怖くて借りて來る氣にはなれなかつた。さうして唯その一部分を櫻田勝徳君が福岡から通つて讀み、私に代つて抄録してくれられたゞけであつた。日記は家のものだから無論世に傳へることは出來ない。又其中より入用な知識を整理することも、外部の者にはちよつと望み難いことである。筆者自身の根氣が正確な索引となつて、此様にも簡明に又むだ少なく、讀み易い形になつて公表せられるといふことは、學界に取つても亦偶然ならぬ幸運で、我々は先づこの周到なる學究平日の用意を、感謝し又手本にしなければならぬのである。



但し私一個の關する限り、川口君に依つて學び又覺り得たことは、この外にもまだ色々ある。是も此序に片端だけを書き留めて見ると、大正の初年の中央公論に、かの杜鵑の研究が寄せられた頃には、同君は既に鳥に關する古今の文獻を涉獵し、しかも古人が出たら目を筆にせず、又その觀察の今よりも遙かに湛念であつたことを信じたにも拘はらず、果して鶯のかひこの中に、今でも時鳥が我子を托するかどうかを、もう一度自分で確かめて見ようとして、毎日握飯を持つて叡山の奥の林へ入り、樹の梢を見つめて居た。さうして愈々其事情と結末とを、なる程と言ひ得るまでに突き止めて還つて來たのである。過去千有餘年間の歌に俳諧に、あれだけよく注意せられた二種の野鳥の生き方にも、まだく此際まで人の知らずに居た、幾つかの特徴のあることが、是と共に明かになつたのである。常人の一生には鳥ほども記録が無く、且つ何千倍か複雑に變化して居る。改めて見なほす必要があるとすれば、眞似するどころか此方にこそ、もつとよく働く川口君を、多數に捕へなければならぬのだと、考へ始めたのは此時からであつた。さうして此御手本が倦むこ

とを知らなかつた御蔭に、この刺戟も亦すつと今日まで續いて居る。

それから飛驒の鳥といふ書物が出ることになつて、自分たちの經營する爐邊叢書の中に乞ひ受けてそれを編入した。私は其一冊を携へて西洋に渡り、レマン湖畔の林の陰の旅宿で、日課の様にして獨りで讀んで居た。そこへ跡を追うて續飛驒の鳥の一卷が届いたのはたしかサレブの山の裾野に、郭公の啼いて居る季節だつたと思ふ。飛驒の山國の雉鳩雀類は、總體に近畿などの鳥よりは呑氣だと書いてある。歐羅巴でも野鳥と人との間柄が、故國で見た様に急迫して居らぬことは私も感じて居たのである。日本の黒鶉はめつたに喬木から降りて來ぬが、こゝでは毎日芝生の虫を引出して食つて居る。足を爪立てると中の見えるほどの下枝に、羽色の極めて美しい鶉の一種が巢をかけて居る。西洋の雀も人に親しみ、人を窺ふ舉動は全く雀だが、鳴聲にはチチといふ音がまじり、衣裳も同様によほど我邦の青嶋と似て居て、第一に昔話の種になつた頬べたのおはぐろの痕などは無い。環境が假に此等の異同を馴致したものとすれば、鳥にも亦書かれざる國史があつたので、人には



任せて置けない日本の鳥の生活を、一々観察しようとする川口氏の勞作が、愈々貴重なものに私には感じられたのである。

羨ましいことには動物生態の方面などでは、一地一時代の代表的な事例が一つ見つかる、比較的安全に他の多數を類推することが許されるらしいが、我々の社會には個々の變化がひどくて、幾多の實驗を重ねても容易には綜合の途が立たず、時と努力とを費して居る割には、應用の効果がまだ十分に擧がつて居ない。それにつけても本書の如き先行の事業が、着々と自證再検討の領域を擴張めて、改めて古傳の寔に誤まつて居なかつたことを確認し、更に一步を進めては前人の未だ心づかず、もしくは簡單なる解説を以て満足して居た點を補充して、國の知識の水準を高めることに成功したのは、我々にとつては何よりも力強い激勵であり希望である。この一編の構造がやゝ在來の類書と異なり、排列を隨意の話題式とし、記述に當初の日録風を保存して居るのは、獨り親近故舊の爲になつかしい好記念たるのみならず、弘く後代の讀者に向つても、この誠實なる生活觀察の態度方法が

行く行く尙大いに成長し、更に宏汎なる收獲を擧ぐべきものなりしことを示して居る。乃ち志を同じうする國中の小壯學徒は、自由にこの事業の後を繼ぐことを招請せられて居るのである。川口君自身も亦、幸ひにして宿痾全く治したならば、急いで再び是が増補改訂の爲に、勇躍せずには居られぬことゝ信ずる。

(昭和十一年十二月)

### 小林保祥著 『高砂族バイワヌの民藝』

蕃族慣習調査會の大きな報告書が、二十冊近くも續刊せられたのは、既に四十年前の事である。自分も其際は壯年學徒の熱情を以て、片端からそれを読み通した者であるが、あの時ほど強く烈しく、興國の機運といふものに感銘したことは無かつた。我々内地人の隅



隅の生活に就いては、まだ一卷の調査報告書も出て居らぬだけで無く、めい／＼の生れ在所の生活だけはよく知つて居るつもりでも、反省して見ると是と匹敵するやうな精密な見聞は、實は持合せて居る者は少ない。然るに國家が撮爾たる新附の小民族の爲に、是だけ周到なる觀察の記録を作つてやるといふことは、尊とい雅量であることは言ふに及ばぬが、同時に又始めて眼前に展開した廣い珍らしい世界への、至つて人間的な氣取らない知識欲の收獲でもあつたのである。私は之を劃然たる一時期として、日本の社會人類學は忽ち大躍進を遂げるであらうと、心の奥底から信じたのであつた。その期待は必ずしも裏切られては居ない。たゞ是には最も利用に適した索引を添付し、いつでも誰でも見たいと思ふ者が見られるやうに、全國に配つて置けばそれでよいと考へたのが、今はまだ其通りには行はれず、本が少しづつ古く又稀になつて來るのを悲しむのみである。斯ういふ急ぎの事業には誤りが有り缺漏があり、後々多數者の力を以て少しづつ、補正し完備する必要があることは最初から一般に認められ、其希望も亦次々と充されて居る。たゞそれが今日はなほ

小さな研究室内の勞作に限られて、未だ一般の常識と交渉をもつに至らず、依然として民族學を以て、洋書講讀の仕事であるかの如く、誤解する者の數を少なくして居らぬだけは遺憾である。北に千年の誼みを傳へた純朴の一異民と對立して、この南の島の山人こそは新たなる我々の善知識であつた。それをまだはつきりと心付かぬうちに、今度は又更に雄大なる諸族共榮の時代に入つて來たといふことは、恐らく今日を豫期して居たであらう先輩の士に對して、何か少しばかりすまぬやうな氣がする。

しかし年を取つてから、私にも段々と心付かれたことは、事實を精確に書き誌して世に遺すといふことゝ、知つて身に泌み思ひを深めるといふことゝは、もと／＼二つの事であつて、稀にしか提携合致するものでなかつた。殊に官府の事業は人の交代が繁く、勢い印刷を以て完成と看られやすく、尨大なる小部數の調査書は、しば／＼用の無い文庫に埋れてしまつて、讀まうといふ人々とは隔離せられがちである。中間に若干の親切な解説者があつて、之を手の届く處まで持つて來てくれぬ限りは、折角の雄篇が忽ち過去のものにな



るのも已むを得ない。それから今一つ、國內の學問でもよく經驗することは、意外なそち  
こちの隅からの小さな發言、時々話題の彼を想ひ起させるやうなものが、せめては一年  
に一度か二度出て來ぬやうでは、俗人はすぐに問題が古くなつたと言つてしまふ。殊に一  
方の平和冷靜なる記述に對して、鋭どく情の籠つた個人の體驗は必要な補給であつて、從  
つてさういふ具體的な新らしい見聞が公けにせられる毎に、多くの學問はいつも若やくの  
であつた。私などの携はつて居る國內の民俗學には、さういふ機會が幸運に多かつたが、  
考へて見ると異種族の生活誌にはそれが稍足りなかつた。今回の大戦の副産物としては恐  
らくは今に應接に追ないほども、それが現はれて來て我々を刺戟することであらう。さう  
して同胞の誰彼はその感激に基づいて、更に一國の文化を高めて行く學問に、貢獻しよう  
といふ素志を以て、是からは大いに語ることであらう。僅か十年二十年の後から回顧して  
も、現在はまだこの本のやうな前驅者の小著述の、不思議なほども少ない時代と評せられ  
るであらう。其機運を一轉する爲に、實は私たちがもう大分前から、色々此出版には苦

慮して居たのであつた。

小林保祥君の寫眞集は、今からもう七八年も前に纏まつて居た。言はゞ耀かしい東亞文  
化の東雲に先だつものであつた。しかも南臺灣の山地民の生活は、最近の經濟變動に伴う  
て急激に變化しようとして居る。或は是が後代に遺さるゝ唯一の資料となるかも知れず、  
さうで無いまでも同じ機會は殆ど又來ない。誰からも頼まれずに十七年の間、たつた二つ  
の蕃社に春秋を送つて、彼等の社會を理解し同情し、更に其記念を後代に留めようとして  
居たといふことは、今後といへどもなほさら容易には望まれぬ條件であつた。小林君には  
日記も有るらしいが、文筆は本職でないから本にして出さうといふ氣にはなれぬかも知れ  
ぬし、又是だけ數多くの寫眞をとつて居るのだから、説明をそれに托したものがきつと多  
いことであらう。元來が寡黙な人で知友に向つても詳しくは説かないが、畫業に關しては  
動かざる一つの主張をもつて居る。中世以往の名工が信仰の爲に、その全能力を傾けて居  
た時代が去つて、始めて藝術の爲の藝術は高く叫ばれて居たけれども、實はその間にはな



ほ一白の空隙がある。今より後遠き未来にかけて、其空白を充たすべきものは智恵であり知識であり之を系統立つべき學問であるといふことを、寧ろ時流に抗してでも、認めつづけて居たのは彼であつた。即ち我々は期せずして、こゝに文化人類學の心強い一人の友を見出したのである。愛すべきパイワヌの常の生活を描いた作品は、自分の知つて居るだけでも既に大小十數點を算へる。それを此上にもなほ豊富ならしめんとして、今なほ大いなる精進を續けて居るのである。

小林氏が十七年の異郷生活に於て、寫し貯へて來た寫眞は驚くべき數であつた。是はその數から言つても又内容から見ても明かなやうに、言はゞ第二の事業であつて必ずしも繪の材料として集めたものではない。彼の作畫が世に出してしまへば、用が無くなるといふ性質のもので無く、それとは獨立して特に我々の學問の爲に、其まゝ利用しなければならぬものばかりである。残念なことには深い事情があつて、山から種板を携へて來ることが出來ず、たつた一枚の密着が残つて居るだけで、それも年月と共に色が替らうとして居る。

永くもつものならば今少しく資料の豊富な世になつて、もつと手際よく印刷にしたいのは山々だが、一方には研究者の需要も日に加はるので、強ひて作者と書肆とに懇請して、少しでも早く之を世に公けにせんとするのである。大體に目的物の種類によつて分ち、最初には現今やゝ問題になりかけて居る高砂工藝の特色を、示すものを以て第一冊を作ることにした。この後には信仰の諸行事、生産衣食に關する習慣等、各一冊とする計畫になつて居る。小さな器械によつたやゝ素人くさい作品もまじつて居るだらうが、是でも短期の旅客には今ではもう企てることの出來ないものが多いことを思ひ、少なくとも廣い土地と遠い時代との讀者に向つては、適切なる保存事業であらうと私は信じて居る。

(昭和十九年一月)



## 柳田國男編『沖繩文化叢説』

このたびの戦亂によつて、中斷せられた學問の中でも、殊に再興のむづかしい一つは、南の島々の文化史の研究であらう。其理由は幾つもあるが、我々の一部がすでに甚だしく年を取り、しかもまだ今までの成績を、有効にまとめ上げて居なかつた爲に、嗣いで起つ人々との連絡が取りにくく、あたら熱情を抱いた若い學徒として、再び最初からの勞苦をくり返さしめる懸念のあることが、特に我々の心を淋しくする。曾てあれほどにも大事にせられて居た沖繩諸島の遺物典籍が、一朝の劫火に遭つて散佚し去つた事實と共に、是はたゞ手を拱ぬき永く歎息して、さて止むべきものではないと思ふ。固より私たちはまだ微力であつて、何ほどかこの恢復の事業に、寄與し得るといふ自信も無いが、せめては諸家

の研究が如何なる方向に進み、如何なる段階に於て今は停滯して居るかといふことを世上に紹介して、かつは一般の關心を高め、かつは又後代の同志の爲に、離島の文化の必ずしも孤獨ではないことを、夙く我々も亦立證せんとしたことを談りたいのである。この書の出現に關しては、隠れたる數々の好意がある。

我邦の上世記録は、その成立ちが中央の狭い地域に限られて居た。國民總體の生活が、今日の如くになつて居る理由を是によつて解説しようとする、いつの世に於ても無理は免れない。史料の補充とその採集區域の擴張とは、夙くから必要を認められて居たのである。所謂三十六島の古來の住民が、大和島根の人々と根元に於て一つだといふことが決定しないと、種々なる推論は前提を缺くことになるのだが、この點は既に久しく心づかれ又八九分通りまではもう證せられても居る。我々はこの大よそ確かなる假定に基づいて、正史に書き盡されなかつたさまざまの變化と、あらゆる可能性とを見つけて行かうとして居たので、必ずしも外から島々に國を立て、居た人たちの文化を、味はひ又は批評しよう



といふが如き、氣輕な知識慾で無かつたことは、恐らくは彼方の側に於ても亦同じだつたらうと思ふ。この相互の暗示啓發、古い概念からの共同の離脱といふことは、雙方に一致したまことに楽しい經驗であつた。たとへば固有信仰の展開した過程などは、あまりに幽玄である爲に、まだ定説に達することが望まれなかつたが、言語の問題に至てはすでに著しく、世の常識といふものを改めて居る。同じ一つの國語でもとはあつたものが、時の環境のさまざまの條件、時としては單なる偶然の刺戟によつてでも、なほこの様に大きな變異を來すものだといふことを、同時に學び知り又是を將來の交通の上に、試み行ひ得るまでになつて居たのである。機會が幸ひにして許すならば、兩地の學問の協力は、少しでも早く之を恢復することが、人類全體の幸福であると我々は信じ切つて居る。

この小さな私の計畫に對して豫期以上の大いなる支持があつた。今度は書けないが此次の一冊には、必ず今までの研究の經過の概要を、報告してくれられると思ふ諸君が非常に多い。さうして何れもこの著作の収入を以て、新たなる沖繩文庫の準備の資に、供したい

といふ希望をも是認せられたのはうれしい。殊に感銘するのは南島出身の同志諸君が、故土の現状と是からの經過とに就いて、無限の憂愁に閉ざれつゝも、なほ且つ勇を鼓して學問の前途を押し開き更に餘力を以てこの新らしい研究の興味を、一般に頒たうとせられることである。比嘉春湖・島袋源七の二君は、最初からの援助者であつた。と言はうよりも私は寧ろ、この二人の沖繩衆の爲に、働かされたやうな氣持である。文章の排列は大體に筆者の年齢順によることにして見た。但し最後の二人だけは例外である。

(昭和二十二年四月)

### 太田陸郎著『支那習俗』

この類の書物はもう大分出て居て、珍らしくも無いやうに思ふ人の爲に、敢て二三の特



長を述べて置くことは舊友の義務である。

此著が細心なる實地の觀察に基づき、しかも色とりどりの都府の風流には目を假さず、大むねくすみ切つた片田舎の、貧しい生産者たちの毎日の營みを、倦まず輕んぜず堅からも横からも、見て取り寫して殘さうとしたことに、先づ我々は一つの價値を認めて居る。大抵の旅人は、急いで斯ういふ方面は通り過ぎるのがきまりで、たま／＼瞥見の切れ／＼の印象が、背後に潜むものを推測せしむるに止まつて居る。土地に年久しい文章の家があつたとしても、よほどの因縁が無い限り、注意を此様な生活には傾けようとはしなかつたらう。それが何等の綜合を要せず、其まゝに或地或年代の現實の事相として、永く後世に傳はるやうになつたといふことは、獨り日本語の領域だけの收穫では無いと思ふ。他日若干の固有名詞が、憚る所無く示されるやうになれば、無論この記事の興味は又具體化するだらうが、さうで無くとも長江中流の、水から遠くない古風な邑里に於て、全く我々の知らなかつた、斯んな一つの人生といふものがあつたのである。それを兵馬の暇ある毎に、

いつも學究のやうなつゝましい態度を以て、ちつと見つめて居ようとした一人の武士があつたのである。

搜しても他には似たものが無からうと思ふ一事は、此書が日本の民俗學の學徒によつて、専心に書き綴られたといふ點であらう。我々の同志は幾人か御國の爲に働いて居るが、或者は各處に轉戦し、又は繁劇な公務に煩はされて、土地の住民と接觸する折が少ないらしい。ところがこの本の著者のみは、珍らしいほどに永い間、或限られたる土地の守備に任じ、少しづつは土語を學び又何人かの顔なじみをこしらへて居る。手眞似まじりのほゞえましい對談が、眼に浮ぶやうな場面も色々有る。太田君は出征の前夜まで、忙がしい本務の隙を利用して、日本の文化史を明かにする研究を續けて居た。十數年の勞作が積り積つて、近畿地方の傳承は明かになつたものが多く、愈々その知識の整頓に着手しようといふ、ちやうど油の乗りきつた箭先に、一應は之を中斷しなければならぬ境涯に置かれたのである。未練といふ程では無くても、普通の人ならば、ちよつとまごついてもよい所なのに、



船の中で十分に腹をきめられたものか、上陸最初の日からもう脇目もふらず、中華民国人の生活を観察し始めて居る。さうして次々と行くさき／＼の見聞を、故國の知友に通信したのみならず、更に持つて還ればすぐに一卷の書を成すまでに、五年有半の成績が纏めてあつたといふ話である。自分等の想像では、日本に戻れば又すぐに、日本の仕事に取掛れるやうに、身を軽くしようとして居たのかとも取れる。それがこの記念すべき外國の經驗を、どんな風に役立たせるであらうかは、今まではまだ試みる機會が無かつたのである。愚かしい繰言ではあるけれども、どうして又還つて來ずにしまつたのかと、際限も無く歎息せられる。

民間傳承の會の同志の中でも、太田君が古書を愛して、珍らしい多くの事實を知つて居ることゝ、その天然の觀察に於て、人に優れた鋭い感覺をもつて居ることゝはよく知られて居た。その二つの長處は本書の行文のうちにも顯はれて居るが、さういふ中でも私に取つて、殊に思ひ出の深いのは樹木についての逸話である。故南方熊楠先生の最後の手簡

といふものゝ中に、太田君が中支の丘陵地帯をあるいて居て、峠の路にはコノデガシハの樹を見ることが多いのは、古書の記述に合ふから人が之を栽ゑて、指標としたのではないかと通信したのを、軍陣の間に於てよくも氣がついたものと、賞讃せられた一節があつた。或は江南に何故か今は梅花が少ないと報じたのも、春に先だつて常々心にかけて居たのがゆかしいとも謂つて居られる。私はちやうどその梅の盛りな頃に、或日太田君と二人で相模の國府附近を逍遙したことがある。この邊は一帶に農民が梅樹を愛して、家の戸の口から又は村の小道から、眺められるやうな垣根には必ず栽ゑて居る。それを太田君が先づ興味をもつて、斯んな小さな屋敷にも梅が咲いて居る光景は、上方の方には少ないと頻りに感心した。或はこの花が特に好きだつたのかも知れないが、もう是からは此人を憶ひ出さず、梅咲く村々を散歩することは出來まいと思つて居る。それから今一つ、中支滯陣の二年目の秋に、たしか武昌大學の並木の實だと謂つて、二十粒ばかりのケンヂナシの種子を、郵便に封して送つて來てくれたことがあつた。それを早速植木鉢に蒔いておくと、翌



春は芽をくんで何本か育つた。信州から移植した一本の大木の外に、今私の庭に在る若木は皆太田君の種で、それがもう自分の丈よりも高くなつて居る。遺児が成長して父の跡を歩む日が来たならば、必ず一たびはこの小園に訪れ來り、東亞空前の大戦役のさなかに、心あつて中國の土から移して來たものが、どれだけ大きな立派なものになつて居るかを見ることがであらう。その兒もこの小さな著述も、共に太田君の豫期した如く、末遠い人間文化の進路に於て、木高き一つの目標とならんことを、私は切に望んで居る。

(昭和十八年九月)

## 解題集

### 帝國文庫『紀行文集』

一

近世著名なる旅行家の紀行文で、自分が少年期以來再三讀し、今後も若し出来るならば又讀んで見ようと思ふもの若干を、此一編には輯録することにした。勿論是を以て主要なるものを網羅したといふわけでは無い。例へば江馬氏親の諸國行囊抄、次いでは白井秀雄の眞澄遊覽記などは、何とかして世に傳へたいと思ふ雄篇であるが、前者は原稿を整備することが容易で無く、後者は又精密なる彩畫を伴ふものである故に、今回は斷念するの他



は無かつたのである、橋南谿の東西遊記も面白い本ではあるが、既に幾種かの活字版が出て居て、相應に普及して居るから之を省くことにした。

大小の文庫の分類に従事した人々は、屢々地理の部の紀行類は二種の全く形貌を異にした書物が、混同雑居して居ることに心付いたであらう。前期三卷の帝國文庫本などもやはり其例に洩れず、名は均しく紀行とあつても、一方は詩歌美文の排列であり、他の一方は記述を専らとし、旅人はその事實の陰に只つましましやかに自ら語るに過ぎぬものであつて、之を一架に統括することは甚しく讀者子の思索を紛亂せしめる。紀氏の土佐日記を始めて、古來世に行はるゝ紀行の書なるものは、寧ろ前者の方が日本には多かつた。従つて後世新たに出現した風土觀察の書は、住々にして文學の愛好者によつて、意外な俗文として疎んじ棄てられる懸念があつたと共に、更に此種の記録を世に遺さんとする者をして、無益の彫琢に苦辛せしめるやうな結果をさへ見たのである。自分等は必ずしも吟詠を敵視する者では無いが、紀行を読む時はかりはこの別行一字下げの數十字を、追飛ばして進むこ

とを習ひとして居る。さういふ筆者の時々の感興に追隨して居ると、旅を知らうとする第一の目的がお留守になるからである。明治大正の旅行記に於ては、幸ひに詩歌俳諧の技藝を併せ示さうとする風は衰へたが、しかも尙何の某といふ風流人、乃至は多感の才子が旅行をして居るのだといふことを、主題として居るものが稀で無い。それも多くは貴重文献であらうが、少なくとも地誌の一部として之を讀ませようとすることは、分類事業の不備であつたと言つてよい。今度の選集の一つの標準は、努めてこの自傳體とも名くべき紀行を排除して、専ら我國土の前代生活を、如實に語り傳へようとした見聞録風のものを探るに在つた。貝原益軒翁は此意味に於て、まさしく日本民俗學の鼻祖であつた。翁が其時代の流風に抗立して、所謂文字ある者の矜持を思ひ切りよく一擲し、終始田夫野人を讀者として、その多年の經驗を傾け盡さうとしたことは、獨り數卷の諸州巡りのみで無かつたのであるが、今日地方文化の研究が新たに起らうとするに際して、改めて其功業を追慕せらるべき理由は、特に此方面に於て深く且つ切なるものがあると思ふ。



## 二

そこで校訂者としての單純なる所感を列記して見るが、第一に貝原翁の六種の紀行は、特に元祿以後に於ける我邦の讀書界、及び旅行技術の進境を、間接に啓示して居る點に興味がある。此頃までの旅人の生涯の思出草は、都登りと江戸見物であつて、それ故に幾つかの通俗なる案内記が、相繼いで出版せられて居る。其卑近と低調とが漸く倦まれ一方には地理と歴史が少しづつ精確を加へて來て、注意は次第に道途田園の事物に向けられるやうになつて來たのである。益軒の紀行の中では、まづ出版せられたのが元祿九年の和州巡覽記であつて、是にはまだ幾分か京童や江戸雀の習氣が残つて居る。著者も又幾分か凡俗の要求を意識して、用意ある筆を執つたかと思ふ形跡がある。しかし其旅行は翁が齡六十三（元祿五年）、殆ど最終の漫遊と言つてもよいものであつた。是が一種の清新味を供して後、世上の需要の頓に此種の紀行に向いて來たことは、引續いて其以前の日記類が、新

たに整頓せられて世に出たのを見てわかる。例へば岐蘇路之記は貞享二年、翁が五十六の年に江戸から還つて來た手帳であつたが、其前半分だけを整理して、序文を添へたのが寶永六年、既に八十の高齡に達した後であつて、諸州巡り正續七卷に至つては、それよりも更に四年の後、即ち翁が筑前の故郷に於て長逝した前年の、漸く世の中には出たのである。此書の大部分は元祿二年、著者が六十の春の紀行であつて、此年は恐らく此翁の旅行生活の絶頂であつたと思はれる。閏正月の二十五日に京都を立つて、丹波若狹近江を一巡したのが西北紀行、それから引續いて二月の十日から二十三日まで、河内路を南に下つて和泉紀伊、大和を通り抜けて歸つて來たのが南遊紀行、續篇下卷の攝津巡覽は、僅かに中二日を置いて二十六日に家を出で、有馬の湯の山から東播の海岸まで出かけて居る。實に驚くべき健脚といふべきである。旅行記の體裁としても是が最もよく整ひ、觀察記述は共に獨創に富んで居るが、尙それよりも後の旅行でそれより先に出た巡覽記の人望に導かれて、漸く俗耳に入ることを得たのを見ると、此書を世に傳へた功績の半分は、讀者も亦之に參



興して居るのであつた。殊に二十八年も前の岐蘇路之記の後半、近江の湖東から越前を歩いた紀行を其中に交へ、更に尙何年か前の東海道の道中記を、歿後六年の享保六年に印行したなどは、或は貝原氏の意圖で無かつたらうとも想像せられると共に、如何に民衆の間に旅行の趣味が發達し、且つ先生の感化が如何に強大であつたかを考へさせる。羈旅を一種の教科書とする習慣は、今や根強く地方住民の心に植付けられて居るが、それは必ずしも日本の固有のもので無かつた。我々の所謂世間を見る眼は、新たに此類の快活又素朴なる記述を讀むことによつて、此頃から追々に明かになつて來たのである。

## 三

旅人が其日記を家に留めようとする風習も、同時に此時代から普遍したかと思はれるがその多くのものは不幸にして既に埋没してしまつた。道途に奇事異聞無く、筆者も亦尋常であつたものは、自ら謙抑して之を世に問ふことを敢てしなかつたからである。長久保赤

水の長崎行役日記は、此意味に於て新たななる一個の好指導標であつたと思ふ。當時文藝を以て諸國を遊歴する者が、大抵は唱和應酬の雄を以て自ら任ずるに過ぎなかつた間に在つて、獨り斯翁の匆卒の記録のみが、いち早く社會の歡び迎ふる所となつたばかりか、更に後代の爲にこの有用の資料を保存し得たといふことは、一つには勿論機會も之を恵んだのであつたが、又一つには一般旅行家の態度の、既に變化して居たことを語るものである。赤水は水戸藩の學風に陶冶せられた第一期の民間學徒であると共に、兼て日本の地理學の開祖を以て目すべき人であるが、しかも間接なる前驅者の影響は、其述作の隨處に見出されるやうな氣がする。貝原氏の死なれたのは赤水生誕の前々年、ちやうど入れちがひに此世には出て來たので、双方共に八十五歳の高齡に達するまで、孜孜として民生の研究に没頭したこと、及びその既成の聲望に據つて、多數未知の讀者を得たことが、共に不思議なほどよく一致して居る。

赤水が常陸磯原の漂流民を受取るべく、水陸百日に近い縦斷旅行を企てたのは、彼が五



十一歳の年の冬であつた。この前後に尙幾度かの遊歴はあつたらしいが、其行跡は未だ詳かにせられて居ない。寶曆十年の東奥紀行の如きも、奥羽越にかけての数月の旅であつてその若干の逸話は東遊雜記以下の書に散見するが、我々はたゞ書名を聞知のみであつて果して完全に保存せられて居るか否かをも確かめ得ない。ましてや他の老後の手記などは恐らくは郷人も之を見ることが得なかつたであらう。それから考へると此一篇の行役日記などは、事件が重要な公務であり、目的地が異國情緒の本場であつたが爲に、たまたま之を梓に壽することが出来たのかも知れぬが、今日の讀者の感興をそよる部分は却つてその單調に過ぎたる往復途上の見聞にあるので、久しく東國の田舎に引込んで、書齋の思索を事とした學者が、一朝この好機會を利用して飛躍勇進し、歩々に新たなる知見を拾集して行かうとした心持はよく窺はれる。殊に歎賞に値する斯翁の熱情と氣魄であつて、流石は長生をして多くの事業を遺し、一方には又強烈なる感化を、次の時代に與へた人だけにその至つて無頓着な行動にも、往々にして壯者を威壓するに足るものがあつた。たとへば

宮島松浦の半日の假泊中に、率先して彌山の頂を窮めたといふが如き、室津の湊の上陸の際には、急に思ひ付いて夜に入つてから書寫山に登り、曉更に船に歸つてそれから又、大阪への陸行を企てたといふが如き、或は又下關八日間の風待を利用して、漂流者の談話を筆記して安南記二卷、及び漂流海上圖を作つたといふなど、それが其種の事實を書き傳へようとした日記で無いが爲に、讀んで一段と意味深く感じられるのである。

## 四

古川古松軒の東西遊雜記は、橋南谿の東西遊記よりも、世に知らるゝことが僅かばかり後れて居た。従うて屢々不利の混同をさへ受けて居たのであるが、假に書名は獨創を誇る能はずとしても、兩著性質の相異は一目して瞭然たるのみならず、その學術的價値に至つては、彼は遙かに是に及ばぬので、雜記の名稱は寧ろ橋氏の二記に於て適當して居るのであつた。古松軒の方には、此以前に北遊雜記の著があつた他に、更に南方紀州の山川を跋



涉したこともあるのだが、どういふ理由であつたか特にこの東西の所謂雜記だけが、一對のやうになつて共に行はれて居るのである。此書を読む人が直ちに心付くであらう如く、二種の紀行は體裁が既に同じで無い。西遊雜記は天明三年五十八歳の時に、修驗者に姿を變じて獨行したやゝ探險的の風土視察であつた。その記事は尤も暗示に富んで居るが、簡略にして推斷の言多く、且つ目的が幾分限られて居る。其上に往々日次を脱して居る爲に季節日常の印象が淡く、ともすれば概括に流れ易い。長處は多數の見取圖を挿入したことであるが、それも傳寫を重ねて精透を期し難く、又今日の寫眞時代に於ては、大半は既に遼東の冢である。肥前北岸の數日間の記録を、酉年の高水に流失してしまつたと言つて居るが、酉年は此旅行より七年の後、寛政元年の酉であつたらうと思ふ。自分の想像にして誤無くれば、是も貝原氏の諸州巡りが、和州巡覽記よりも後に出たと同じく、一方の東遊雜記が珍重せらるゝに及んで、それに激勵せられて改めて舊藏の日記を、取出して整理したものであつたのである。

古松軒翁も其師赤水先生と同様に、所謂草莽の間に自成した篤學者であつた故に、その社會への進出は非常に遅れて居る。東遊雜記の出來たのは天明の八年、著者が六十三歳の旅行であつた。此回は前年の西遊とは正反對に、堂々たる幕府三巡見使の隨員として、東北の諸藩に於て送迎せられて居る。公務には忌諱多くして、屢々耳目を隠蔽せられたことを歎息して居るが、其實は尋常漫遊の過客の、到底望む能はざる遭遇が多く、記事も亦悉く具體的の見聞に依つて居て、殊に新時代の研究者の爲に、有益なる資料を存して居る。全體この巡見使といふ制度は、いつの頃から始まつたものか知らぬが、風土民情の視察としては、如何にも適切なる一方法であつた。それに古川氏のやうな文筆に長じた専門家を同行したといふことは、恐らくは三人の幕吏の最も殊勝なる心掛であつたらうと思ふが、惜しい哉此先例は後々踏襲せられなかつたやうである。奥羽の天明八年はちようど大飢饉の後を承けて、經濟組織の變動は甚だしく、人心の殊に萎微した際であつたが、偶然に之を観察した幾つかの紀行が傳はつて居る。秋田の方面では同じ年の冬、津村正泰の經歷し



た「雪の古道」があり、更に我々の敬慕する白井秀雄は、是よりも約三年前に略同じ道筋を、出羽の南端から津輕の方へ通つて居るのである。併しそれ等の紀行と比べて見ても、この巡見使の巡路は尙遙かに奇抜であつて、決して俗に謂ふ御奉行路では無かつた。是には夙くからの巡見箇所といふものが、わざとさういふ横筋かひの旅をする様に、指定せられて居たことが考へられるので、自分は此制度の沿革が、今少し詳しく尋ねて見る必要のあることを、始めて此書によつて暗示せられたのである。たとへば今年プロムリーの太平洋横断計畫によつて、漸く世人に知られた青森縣の淋代や尻勞、斯ういふ荒濱までが巡見の通路であつた。それから三ノ戸と鹿角を繋ぐ來滿峠なども、つひ近頃まで之を御雇技師のライマンが命名でもしたやうに考へて居る日本人は多かつたのであるが、此峠の名もちやんと古川翁の日記の中に出て居る。其他鹿角の今一つの通路たる湯瀬の峠、南に下つては一ノ關から氣仙に越える峠なども通つて居るのみならず、往路には白川から勢至堂の峠を會津へ抜けて今でも訪ふ人の少ない只見川の上流、所謂御庫入の村々を廻つたり、或は

米澤から谷川の流について、小國の山村に往復したり、何れも測量部の五萬分一圖でも見なければ、理解も出来ない程の面倒な旅行であつた。それが精確なる記録となつて、斯うして百數十年の後の人に、當時の生活を知らしめるといふことは、全く赤水學派の功績であり、殊には地理の道を始むこと年久しと自稱する人の、老いて尙衰へざる研究心の賜であつた。

單に著者一個の記念としてならば、或は西遊雜記の方が痛快味は多かつたかも知れぬが、讀者の側からいふと東遊雜記は完成であり、一方はたゞその熱烈なる進歩の跡であつた。思ふに九州方面の孤獨微行の旅に於ては、問はんと欲して答ふる者を得なかつた場合も、少くはなかつたのであらう。併し大體に於ては著者の態度は一貫して居た。殊に自分の推服して居るのは、常に最下級に在る地方住民の生活と、其表現とが注意せられて居ることである。書卷に基づいて日本の國風を概論せんとする者が、専ら學者として崇敬せられて居た時代に、此旅人のみは現實に非ざれば信ぜず、しかも其記述に際しては誇張もせず



斟酌もせず、専ら精確を目的として、結論の何れに歸すべきかを念としなかつた態度は、或は豫め今日の科學風の研究に、期する所があつたとさへ思はれる位である。關係ある地方地方の讀者には或は之を見て苦笑しなければならぬやうな記事もあるが、現在既にさうで無くなつて居るといふことは、即ち進歩であり變遷であつて、この新古の比較を明かならしめた點こそは、永く我々の感謝を以て酬いらなければならないのである。

二書の校訂に關聯して、尙一言だけ附加して置きたいことは、是が久しい間寫本として傳はつて居た結果、甚だしく區々の異本があることである。殊に東遊雜記の方は其種類が多いやうで、現に自分が内閣の文庫に於て、三種を比較して見た時は三種とも違つて居た。定本と名くべきものは何處にあるのか、今はまだ之を尋ね出すことを得ない。近世社會經濟叢書に採録せられたものは、廣本とは見えるが何分にも誤脱が多い。此編の底本としたのは第一高等學校の所藏にかゝるもので、此方がよほど確かなやうに考へられる。諸本を校合することの困難なる理由は、著者自身が久しく之を座右に置いて、累次の加除補刪を

して居たらしいことである。それ故に個々の傳寫本は、時代毎に文章と若干の順序とを異にし、到底一を以て他を訂すことを得ないのであるが、我々は寧ろ著者の意圖を掬んで、すべての異本に共通して存する記事だけを、重要且つ確實の資料として利用することにしたならばよからうと思う。

## 五

次に筑紫紀行を此編の中に加へた理由は、瀬戸内海の航路の記事が詳しく、たゞ、四國の一角にも觸れて居るといふことの他に、筆者が尤も凡庸なる名古屋の商人であつたといふことが、殊に興味を感じしめるからであつた。吉田重房通稱を菱屋平七と謂つた人の傳は、或は市史などには載つて居るかも知らぬが、わかつた所で澤山の参考にはなりきうも無い。此紀行は確かにこの富家翁の漫遊の心覺えを、多少の文才ある者に托して筆削せしめ、書肆から再び買上げて知人などに頒つたものと思ふが、それにしても某々氏等の歐



米視察記などに比べると、きまり切つた路を通つて居ないのがまだ頼もしい。殊に觀察の鋭敏といふことは少しも無いけれども、見立てられて大家を嗣いだ程の人物だけに、記述は根氣よく又克明で聊かの落ちも無い。恐らく文章の相談相手が、何等かの潤飾を加へようとしても、それは断じて承知をしなかつたであらうから、乃ち内容は此まゝを受入れてよいのである。瀬戸の航路の大小の島々の名などは、是ほど數多く書留めたものは他に無い。それから九州に入つて宇佐の八幡に參詣し、彦山に登つて筑後川の平野に下つた迄の路筋は、前の西遊雜記とも少しちがひ又遙かに綿密である。殊に山國谷の溪流に沿うた通路は、未だ耶馬溪と化せざる以前の記録だから、珍重して置かなければならぬと思ふ。長崎へ着してからの十數日の日記は、前の長久保氏の行役記や、司馬江漢の紀行などと比べて、又別様の深い興味がある。全體にこの筆者のやうに、富裕で又自由なる紀行といふものは、さう澤山には無いのが當然であつて、是も殊更に書き傳へようとしたもので無いだけに、自然に現はれて居る旅中の生活が、自分も亦一種の書中人となつて居るのである。

歸途沿道の町村の記載の、茶屋あり茶屋無し連續に過ぎぬのは煩はしいが、是も今日は既に變形して居る茶屋といふ商賣が、會てどれ程まで重要な旅行の機關であつたかといふことを、推測せしめる資料にはなるのである。

## 六

大田蜀山の旅行文學としては、この壬戌紀行以外にも傳ふべきものが尙多い。殊に自分などの愛讀したものには、江戸郊外の巡村日記、ちやうど今住んで居る附近の事を書いたものが幾つかあるが、それは旅行といふほどの準備は無かつたものである上に、既に其全部が全集に保存せられて居る故に、爰には只其一編の、最も特色に富んだものを入れることにした。壬戌紀行は前の數書とちがつて、地位ある役人の公式旅行であつた上に、主として家庭と知友との爲に、上品なる話柄を供するを目的としたものであるが、これも蜀山独自の氣質と修養、五十三翁の經驗に養はれた人生の觀照態度が、遺憾無く發露して居る。



當時の公務旅行は勿論今よりも自由なものであつたらしいが、此行は特に兼々の用意を以て、力めて道途の些事に注意を拂はうとした形跡がある。最初大阪を發足した日から、先づ川舟の中に坐して兩岸の風物を記述して居るが、其手法は至つて飄逸であつて、あの川の堤防が今よりもずつと低かつた時代の、近畿の田舎生活が、手に取つて見るやうに寫してある。それから段々東へ進んで来て、毎日々々乗物の中から、路の左右に行過ぎる物を、一つも洩さずに書いて見ようとして居る。或時は駕籠昇きの人足と語り、又或時は茶屋宿屋の亭主をつかまへて話すなど、所謂ふところ紙に矢立といふ忙はしい筆の跡であるが、それが又卒直で且つ如何にも伸び／＼として居る。恐らく此時代の名文の中に算ふべきものであらう。

近頃の國文讀本は、いつも餘りに一節が短かい爲に、斯ういふ日記體のまとまつた一つの感じを、讀者に味はしめることの出來ぬのは残念である。一日一處の記事としては何の奇も無いやうだが、全編としての妙趣は自然に人を引付けて、末には筆者と共に一悲一笑

せしめる程の力を持つて居る。紀行の目的からいへば是くらゐ効果のある文章は無いと言つてよい。此中には勿論江戸の住人らしい好奇心は見える。たとへば餅酒の看板を一つ一つに書留めたなどは、質朴な地方人には無益のやうに見えるが、同時に尋常一様の旅人の知らずに通つてしまふやうな路傍の事件まで、それ／＼理解して居るのは優しいと思ふ。武州深谷の驛で孤兒を見た話などは、何人も彼と共に袂を濕すやうな筆の跡であつた。

貝原益軒の感化力は、爰にも著しく其跡を見出すことが出来る。壬戌の紀行はちやうど岐蘇路の記と逆の旅であつたが、輿中に其書載せて路次に讀んで居たらうと思ふことは屢々益軒の記を引用して、今はさうで無いといふやうなことを言つて居る。如何にも百年の時を隔てると、街道も頗る近代化し、人の心も改まつて居たことであらう。それを又明白に感じ知るが爲に、新たに此紀行は思ひ立つたのかも知れぬのである。それから江戸の文化の地方を動かした力なども、前には心づかれなかつたのが、此頃は既によく眼についた。のみならず筆者彼自身が、碓水を越えると高崎の本屋が嬉しかつたり、熊谷の店屋の



看板が氣に入つたり、次第に都市人の心持へ還つて行かうとする所がよく現はれて居る。蕨から板橋となると家族親類、女や小兒までが迎へに出て来て居る。家に還つて見ると石楠堂の石楠が、まだ幸ひにして散つて居なかつたといふあたり、情趣の紙端に溢れて、それを又意識せずに書いて居るのが、殊に此旅人の人柄を懐かしく思はしめるのである。

## 七

最後に今一つ、小笠原長保の甲申旅日記は、是もやはり比較の興味を爲に編入したもので、現代東京の住民の日返りに遊覧する場所ばかりを、斯うして百年前には大規模な旅行をしたといふのが珍らしいのである。原本の所在が不明になつて居る爲に、誤脱があるらなければ十分に訂正することが出来なかつた。併し箱根の記事などは、新篇相模風土記によつて補充することは難くないと思ふ。著者の傳記は此時の下田奉行、小笠原加賀守と謂つた人といふことはわかつて居る。さうして此方は筑紫紀行とちがつて、全部自分の作

であつたらうと思ふ。上手でも無い歌が多く交つて居るのは感興を防げるが、文章は眞率でよく意を達して居り、是も半分は筆者自身の境涯が、記述の上から間接に窺れる點が、永く傳へられてよい理由になつて居る。江戸の官人などの知識といふものは、兎角一方に偏して居て、蜀山のやうな學者は誠に稀有であつた。この小笠原氏も珍らしい讀書家と見えて、萬葉から吾妻鏡までもよく見て居るが、しかも一方には富士山へ十三里と言つたり、齊の花が黄いろなどいふことを書いて居る。さういふ氣持の人に觀られた田舎であるから、決して何もかも書き載せられて居たとは考へられぬのである。しかも今古を通じて伊豆の突角から三崎の鼻までの海濱を、是だけ長い日數をかけて見巡つた記録といふものは、他には一つも無いので、我々の如く日本の隅々を知るが爲に、材料を漁りまはつて居る者で無くとも、斯ういふ特色のある前代人生の記録には、いつかは引付けられずには居らぬことゝ信ずる。是が又古書覆刻者の、心の底の願であつた。

〔附記〕「益軒の大和紀行」の刊年に就て金井寅之助氏より注意をうけた。(大和文學第三輯) 同氏の意見が正しいと思ふ。



## 赤松宗旦著『利根川圖志』

「利根川圖志」の著者赤松宗旦翁の一家と、此書の中心となつて居る下總の布川といふ町を、私は少年の日からよく知つて居る。此書が世に公けにせられた安政五年から、ちやうど三十年目の明治二十年の初秋に、私は遠い播州の生れ在所から出て来て、此地で醫者をはじめた兄の家に三年ばかり世話になつた。さうして大いなる好奇心を以て、最初に讀んだ本がこの「利根川圖志」であつた。それから又五十年、其間に利根の風景も一變した。堤防は無闇に高くなり、幾つかの鐵橋が架つて汽車が走り、其代りには縦の水運が衰へてしまつて、松の林に行く白帆の影も消え、あれだけ多くの高瀬船が、來ては風待ちをして居た處々の川湊は、何れも川と縁を切つてしまつて、水に燈の火の映るといふ家も、坐つ

て川の見えるといふ二階も無くなつた。さういふ中でも布川などは、戰國以來の由緒を誇る小都會だつたが、幾分か他よりも早く農村化の兆しが現はれて居たやうである。私が覺えて居る頃にも、此本の挿畫にあるよりは堤防はずつと高く、家は屋根の瓦ばかりがきらきらとして、舊家の間屋の表先はほの暗く、少し下手へ行くと堤の外はもう畠地で、第二の荷揚げ場はその間に移されてあつた。河岸が年々の出水のたびに淺くなり、水筋が遠くなつて、段々に船を寄せ難くなつて居たからである。著者赤松翁の故居は宿の中ほど、この新河岸から土手を超えて、降りて出る角に在つた。思ふに利根川水運の最盛時は、此書の出るよりも又數十年前の前、潮來出島の花菖蒲の民謡が、川に沿うて大江戸の町まで、運び出された頃に在るのであらう。著者が生れた文化の初年から、水災の記録は少しづつ多くなつて居る。上流の開発が進んで行くと、出る水に押出される砂土の量が加はり、川床はあがり瀬は變つて、兩岸の利害が相刻し易くなつて居たものかと思はれる。その動搖と未來に對する不安が、著者自らも意識せぬ此書の動機の一つであつたことは、文章の咏歎



味が幽かながら之を暗示して居る。

布川は銚子から關宿への全航程の、ほとん中であつたといふのみで無く、流れが兩丘の間に狭まつて、爰へ来て大いに屈曲して居る。川を隔て、三つ四つの船着場が、對峙して居たのもことばかりである上に、僅かな枝路を以て濱街道に連なり、江戸との交通は陸上でも緊密であつた。對岸の布佐の町は新地だと言はれてゐる。その本村は元祿にはまだ岡の上に在つて、河岸は漁師の住む網代場であつた。夜の宿なまぐさしと芭蕉の紀行にも記してゐる。是に比べると此方には古いものばかり多い。勿論名門は次々に衰へて居るが持ち傳へ又積み添へた風流には、昔なつかしいものが色々あつた。たとへば人間の楽しみは佳い水で茶を入れて、川を眺めながら飲んで居ることだと謂つた老人がある。茶には最も川の水がよいが、それも蠶養川から出た水はいけない。鬼怒川の水は岸からすつと遠く、中流よりも南を流れて居て、色が澄んで居るから誰が見てもわかる。佛事や珍客の來る日はそれを汲みに遣るので、他には用も少ない水汲み舟を、繋いで置く家もあの頃は多かつ

た。一茶といふ珍しい俳人の名前を、始めて私が學んだのも「利根川圖志」であつた。近郷に聞えた布川の金毘羅角力では、私の時代にもやはり木に登つて見物する者が多かつた。あの一句は即ち率直な寫生であつたのである。一茶が頻々と此地へ往來したのは、日記を見てゆくと文化の中頃過ぎ、即ち幼年の赤松氏が父母に伴はれて、暫らく江戸の片ほとりに出て住んで居た間などであつたが、爰には早くから幾人かの俳友があつて、消息相通じて居たらしいことは、「霞の碑」といふ句集からも窺はれる。江戸にも其名を知られた古田月船は、一茶が布川に於ける東道の主人であつた。多分は問屋の隠居であらうと、根據は無いけれども私はさう思つて居た。其想像は當つて居たが、是も代替りをして子孫はもう残つて居ない。

一茶の紀行にも見えて居るやうに、他處から遊びに来て長く居り、又は計畫して移住した人も段々ある。それが居心地よく現在まで住付いて居るといふのも、常の田舎には見られぬ生活の餘裕があつたからと思ふ。それを詳しく説くことは私には楽しみなのだが、餘



りにも當面の題目とは縁が遠い。こゝに入用なことはこの赤松家が、やはり近世の移住者だつたことである。赤松家で通稱を宗且と謂つた人は三代ある。「利根川圖志」の著者はその第二世であつた。父の初代宗且は三十九の年に、多分は諸國を遍歴した後に、此地へ入つて來て醫業を開いた人である。先祖は播州の一城の主だつたといふが、生れたのは遠州の中村、醫者の修行をしたのは江戸であつた。布川に十六年居住して五十の年に著者を儲け、五十四で再び江戸へ出て千住に住み、五十七歳で世を去つた。此人の傳記は氣を付けて居ると、少しは判つて來る見込がある。圖志の自序にも論じて居る印旛沼開發は、此時代としては珍らしい政治問題であつた。裏面に長い間の畫策と運動が行はれて、漸く實行に移されて程も無く頂挫したのが、此書の刊行よりは十五六年前のことであつた。本文には之に關する格別の記述も無くて、序文に突如として斯んなことを説くのは、何か隠れたる意味が無くてはならぬ。少なくとも著者は此事業の成立ちと内情とを、世間の人よりもよく知つて居たのである。さう想像してもよい有力な理由がある。二代宗且は八歳の時に

父に死に別れてから、母に連れられて其里方、印旛沼西岸の吉高といふ村に來て育つた。江戸とか佐倉とかに留學したのかも知れぬが、其事に就いては別に傳はつて居らず、印旛地方の事跡だけは、此本の中にも詳しく敘べて居る。さうして再び布川の町へ戻つて來たのが天保九年、三十三歳の時であつた。沼開發の着手は天保十二年だから、直接其事務に携はつて居ないことは明かだが、それで居て是ほど深い關心をもつて居るといふのは、寧ろ特殊の理由があつたことを察せしめる。印西の吉高村などは、決して布川のやうな交通の衝では無かつた。旅に半生を送つた初代の赤松宗且氏が、其村の舊家と縁を結んだのも、或は彼自身が夙に開發事業に參與して居た爲に、屢々この土地に往來した結果とも考へられる。佐藤信淵翁の書いたもの、其他この一件の記録を搜して居たら、ふいと此人の名前が出て來さうな氣がするが、家では今のところ道服と旅刀が一本と、方々歩きまわつた人らしいといふ言ひ傳へとが、残つて居るだけだと言つて居る。

信州碓氷峠の巖石を焼き崩して、東西二つの海を繋いで見たいといふ空想にも、私たち



は信淵一流の新學の香を感じるのであるが、それをこの簡略な序文の一篇から、論究しようとするのは無理であらう。問題にしてもよいのは「利根川圖志」の抱負が、元は今ある形よりも遙かに雄大であつたのを、後年生活の實情に讓歩して、忍んで計畫を縮小したのではないかといふことである。此書卷頭の全利根川圖は、遠く藤原山間の水源に筆を起して、沿岸數十里の地名を、ほゞ誤謬無く注記して居る。一部は既存の資料を綴り合せることが出来たにしても、なほ是を正確にするが爲に費を投じ人を派して、其復命を待つたと傳へて居るのは事實であらう。あの當時としては誠に容易ならぬ辛勞と言はなければならぬ。その最初の目的が何にあつたかは別として、とにかくに他日親しく其地を踏査し、此圖と匹敵するやうな地誌の書を遺さうといふ、志のあつたことだけは推察し得られる。それがいつの間にか年を取り、又新たな色々の感慨の錯綜するものがあつて、區域を川船の上下する中流以東に限り、小さな完成を急ぐことになつたのは、この何か意味ありげな序文の言葉、及び僅か四年の後に世を去つたといふことなど、思ひ合せて、寧ろ我々の同情

せずには居られない點である。醫人は昔から學問の自由を羨まれて居たが、それも大都の中に住むものゝことで、地方に居て著述を世に留めようとすれば、其不利はやはり甚だしかつた。「北越雪譜」といふ本が時好に投じたことは、可なり赤松氏を刺戟して居るやうに見えるが、是は代作に近く、又たしかな引受人が江戸にあつたらしい。之に反して「利根川圖志」の方は、最初から素人の獨力の業であつた。版下も多分は自筆かと思はれるが其淨書に就いても相談相手は無かつたやうで、字配りや體裁にも巧者とは言へぬ個處が多い。今度細かに讀んで居て氣が付いたのは、彫師が彫りちがへた文字が珍らしく此本には多い。何としても解し難い草體が、はや序文の第一頁にも見られる。是はまだ校正といふものゝ必要を知つて居なかつたか、さうでなければ睨みが利かなくて、職人が埋字の手數を惜んだかで、固より著作者の投げ遣りでは無いと思ふ。挿畫は此種の書物には大切なものだが、是にも若干のごまかしが見られる。今となつては是さへ懐かしい過去文化の痕跡であるが、當時初刷を受取つて急いで開いて見た、著者赤松翁はさぞ氣持ちが悪かつたこ



とであらう。是も亦私たちの同情を一段と深くする。

しかし地方篤學者の初めての著作としては、この出版は必ずしも失敗で無かつた。布川の赤松家には、今でもその際の帳簿文書を大切に所蔵して居るが、是を見ると初版は六百餘部、更に若干の追刷をしたといふことである。其一半を江戸の書店に遣つて取扱はせ、残りは利根川兩岸の村々の、地役人や重立ち衆に分配して、それ／＼二分一朱以上の謝禮を受けて居る。江戸の勘定の方は結末が不明だが、とにかくに黒船渡來の騒ぎが起つて、政府では此類の書物の流布をいやがり、壓迫を加へたので追刷などはむだになり、財政上では相應な損失であつた。其の追刷も追々に知友の間に頒たれて、現在は家に残つて居らぬといふことであるが、それでも私などは是を成功の中に算へて居る。前後千部に近い「利根川圖志」は、今でも關東南半の稍狭い地域の、どこかに存在し、誰かに讀まれて居るからである。焼けたり流されたりしたものは已むを得ぬとして、有つたら少年にも譲へして看すには居られぬ本だからである。襖の下張りや紙袋になつてしまふべく、餘りにも愉快

な又活き／＼とした記事が目に着くからである。但し關東以外の地方では、之を知らず居た人もまだ多い。乃ち文庫の収録は又新たなる一つの機會である。

此書の價值と情趣とを發見することは、讀者各自の楽しみに任せる方がよい。少しでも私はそれを指導しようといふ様な考へはもつて居ない。たゞ自分が同じ郷土の空氣を呼吸して居た爲に、知つて居る二三の事實を爰に書き添へて、此書覆刻の喜びを記念するまでは、許されてもよいかと思ふ。著者の讀書と引用の豊富であることは、此書を見る者の感ぜずには居られぬ所であるが、是は必ずしも彼一人の卓越した境地では無く、當時この地方の學問の最高水準が、或はもう此點に達して居たのでは無いか、と思はれるやうな理由がある。赤松氏よりは又若干年おくれて、やはり此地へ移住して來た小川東秀といふ醫家がある。其子を東作と謂つて良醫の譽れがあつた。この父子は既に歿して、家には一倉の文庫が残つて居た。私は偶然にこの文庫に出入することを許されて居た故に記憶がある。「利根川圖志」に名を録して居る澤山の書物が、大抵は皆此中に在つたのである。或は赤



松氏の藏書が、後に此方へ移されたかとも考へられるが、此想像には些かの根據も無い。寧ろ此時代を距ること遠からざる頃に、常總の學者の手に成り、もしくは常總の故事を檢討した新著であるが故に、土地の教養ある人士は争うて之を求め讀み、従うて又それを自在に援用したことが、「利根川圖志」の隠れたる一魅力でもあつたのかと思ふ。

さういふ中に唯一つ、小川氏の文庫にも無く、又「利根川圖志」に抄録せられたもの以外に、まだ見たことのないのが「常總軍記」、或は「東國戰記」ともいふ一書である。間接に讀んで見てもよくわかるが、是は誠に愉快な本であつて、大よそ土地の人々が斯うであつたら面白からうと思ふやうなことが、皆その通りに歴史として書いてある。布川を中心として周圍十數里の村の名を、苗字にした勇士が入交つて戦をして居る。さうして其事蹟は壯烈を極めて居るのである。前にも此類の語りものは弘く地方に行はれ、軍書が其技術を承け繼いだ例も決して稀でないが、多數はなほ針小棒大とか眞偽相半ばすとかいふ境をうろつて居る。此書の如きに至つては全く思ひ切つたものであつた。是が如何なる目

途の下に、どういふ人によつて書かれたかといふことは、赤松氏も大よそは知つて居たと思ふが、既に成書として世に行はれて居る以上は、書名を掲げて之を引用することも、話題を豊かにする意味でよいことゝ認められたであらう。いやしくも傳説の耳に快いものは、必ず歴史として之を固守しようとする今日の郷土史觀と、僅かな間隔だが心持ちはよほどちがつて居る。「常總軍記」に出て來る諸葛孔明は、其名を栗林下總守義長と謂つて、是は女化の原の狐女房の子だと傳へ、葛の葉とよく似た昔語りが添へられて居る。時は「日本靈異記」の昔から、土地は奥州卒土ヶ濱の果まで、遠く久しく流れて居た文藝の一つであつたが、下總北部の或村には、特に其狐の血筋を引くと傳へる孫左衛門とかいふ農民の家があつたことは、江戸で近い頃までの語り草であつた。「常總軍記」は多分その幽かな口碑を足がよりとして、際限も無く展開させて行つた夢物語だつたのである。如何に近世までの關東の田舎が、文獻に飢ゑて居たかは是からでも推し測られる。

それから今一つ私の知つて居ることは、此書に幾つかの太閤記風の挿畫をかいて居る玉



蘭齋貞秀、この人は、澤山の極彩色の武者繪を、布川の町に残して居るが、それも板戸とか勝手の衝立とか、可なり粗末な取扱を受けて居るものが多かつた。實名は聴いてもう忘れてしまつたが、土地で調べたらまだわかるかも知れぬ。何でも屋根屋とかの職人であつたのが、器用で繪をかいて其方で生活するやうになり、それも江戸では暮しかねて、戻つて来て永く住んだ様に謂つて居た。それが赤松翁と世を同じくし、その註文を受けて斯んな大時代な作品を掲げて居るのも面白い。是も「利根川圖志」の素人らしい特徴の一つだが、挿畫の畫工の數が甚だ多い。多分は何度にも頼んでは溜めて置いたものであらう。其中で落款の無いのは葛飾北齋だといふことであるが。水虎考略其他にも出て居る河童の繪が、やはり無名で入つて居るなどは不審である。土地の人の言つて居るのは、北齋は一時師匠の許をしくぢつて、爰へ来て匿れて居たことがある。其間に描いたものだから落款を入れてないといふが、圖志の世に出るより十年も前に、九十で歿した人だから事實に反する。或はその又弟子の一人などが、中に立つて何か作略したことが、斯ういふ風に誤り傳

へられたのであらう。僅かな年數のうちにも、どんな小さな問題にも、やはり傳説は出來て居る。たとへば私の兄は若い醫者で、此地では殆ど最後の移住民であつたが、三代目の赤松宗且翁とは同業の誼みで懇意であつた。僕も本姓は赤松で、御同様に故郷は播磨などと、杯を把つて笑話して居たのをよく耳にしたことがある。それがいつの間にか兩家二人づれで、遙々と播州から移つて來たやうに話は進化して居る。是だけは事實で無いことを私が保證する。

この三代宗且翁は婢養子であつた。柔和な緒ら顔の好々爺で専門は産科、兄の長女の本年五十歳になる者なども、此老人の世話になつて世に現はれた。其折短冊に書いて下さつた一句も私は記憶して居るから、養父に似て風流のたしなみもあつた人である。此人にはみや・きよ・みきといふ三人の娘があつた。總領のおみやさんと結婚して跡を續いだのが資次郎氏、是が二代目宗且の男宗造、高須の赤松家の次男で従兄妹どしであつた。茨城縣では最も功勞の多い老校長として、永く山王といふ村に住んで居り、其傳記は北相馬郡史



などにも出て居る。此夫婦には三人の男の子があつた。長男は始祖宗旦の實名を嗣いで惠といひ、今東京に出て働いて居る。二弟は若死したが、此三人も又その叔母たちも、共に忘れることの出来ない私の少年の日の友であつた。惠氏の子磐は今鹿島に行つて教職に就き、布川の舊居は母夫人が獨り守つて居る。家は昔のまゝで大よそ變つた所が無い。たゞ門の目標であつた一本の松の樹が見えぬのみである。

布川は既に繁華の邑で無い故に、其家並みなどは却つて變化して居ない。大體に五十年前の生活を保持しては居るが、たゞ關東でも珍らしい「つく舞」のある夏祭は、今はもう行はれなくなつたさうである。是と同じ行事は上總の五井にあり、又秋田の附近で蜘蛛舞と謂つたのも是らしいが、果して續けて居るかどうか心元ない。「利根川圖志」の精細を極めた敘述は、やがては得がたい記録となることであらう。それから色々の川漁の方法、又手賀沼のカハといふ水鳥獵なども、現在は何れもよほど變化したやうである。毎年千を以て算へられた上り下りの高瀬船が、來ては舟繫りをして遠くの話をしてくれなくなれば、

此上流にどんな人が住むのやら、又川下には如何なる生活が有るのやら、もう少年たちには想像し來ぬ時代が來ることであらう。それは全く著者の豫期しないことではあつたが是が爲に寧ろ「利根川圖志」の教育は、一段と貴重なものになるのである。私たちが旅を好んでした時代には、此本は餘りに大きいのでポケットに入れて行くことも出来なかつたが、其代りには人々に是をよく讀ませて、その記憶を携へてあるいたものである。思ひ出すことの一つは、最近亡くなつた末弟が十四歳の時、僅かな金をもつて夏の盛りに、利根川の堤を二人で下つて行つた。腹がへつてもうあるくのはいやだといふのを、あしか島を見せてやるからとすかし勵まして、夜路を到頭銚子の濱まで行つてしまつた。實は船賃をのけると一泊の金が無かつたからである。ところがその海鹿島には、もう「利根川圖志」のやうな海鹿は上つて居なかつた。さうして評判の遠目がねは割れて居た。是がその獣の皮だといふ毛の禿げた敷物の上で、梅干と砂糖とだけの朝飯を食べて還つて來たことがあつた。斯ういふ種類の旅行や遠足も、算へて見ると十回は超えて居る。それが皆この「利



根川圖志」を、曾て興味を以て讀み入つて居た御蔭であつた。此書を仲立ちとした色々の古い記憶も、斯ういふ機会があるたびに又暫くは殘留する。書物の永く世に傳はるといふことは、決して著者ばかりの幸福ではない。

(昭和十三年七月四日)

### 根岸守信編『耳袋』

耳袋は寫本としては珍らしく流布の多い書物で、現に我々の目に觸れ又は所在を突留めたものだけでも、三十種に近い數であつた。それが殆ど一つ一つ卷次を異にし、従つて又話の數と排列に著しい差を示して居る。大體に此本の卷一と卷二とだけを、數冊に分つた

ものが多く、卷三以下は比較的少ないやうに思はれる。印刷に付せられたものは明治以後に、少なくとも四種はあるのだが、其三つまではやはり前者に屬し、獨り藝林叢書第十卷(昭和三年刊)に輯録せられたものだが、此本の半分と、別になほ他の三卷とを合載して居る。つまり今日知られて居る限りでは、耳袋は總計で九卷あるわけで、此後なほ發見せられるものが、無いといふことは斷言できない。岩波文庫には自分所藏の一種を基本として先づこの六卷だけを刊行することにしたのだが、是がほゞ又編述の年代にも一致して居るやうだから、残りは續編として逐次に附加して行けばよからうと思ふ。

此書が全體で何卷あつたらうかといふことは、夙くから問題になつて居る。藝林本での卷二の奥書に、當時七十三翁の著者は斯う誌して居る。佐渡在勤の頃から書集めて置いた話が九百ヶ條になつた。今百ヶ條を書き添へたいと思ふが、忙しくもあり又年を取つて筆無精にもなつたから踟躕して居る云々とある。さうしてなほ六年ばかりも在世し、且つ現に其時以後の記事を載せた一卷も有るのだから、十卷千箇條に達したといふ其頃の風聞も、



決して根據の無いもので無く、事によつたら更に其以上にも、書いて残してあつたのかも知れない。今日の眼から見て不思議と感ぜられることは、二十数年の歳月を費して、老の限りに至つてなほ完成しなかつたかとも思はれる一つの書物が、どうして又此様にまで世にもて囃され、且つ色々の異本を遺して居るかといふ點であるが、是には二つ以上の前代風習の、既に忘れられたものがあるのである。其一つは寫し物の流行で、江戸には閑人が多く、耳で珍らしい話を聴きたがつたと同様に、少し變つた本ならば寫して置かうといふ者が、賢愚を通じて數多く居たことである。最初の借出しは無論容易なことで無かつたらうが、日頃心を許して出入させて居た者の中に、特に内々を以て見せても居たらうと思ふのが、現にこの本の中にも出て来る栗原某のやうに、幾人かはあつたらしいのである。一度斯ういふ人の手に入れば、それから先の流傳は案外に速いものであつたらう。といふわけは彼等には亦別懇な人が他にもあつて、いつでもごく内々に特別を以て貸して置けば、寫し取つたに違ひないからである。今ある寫本の中には寛政年間、即ち此書がまだ半分も

出來てない頃に、寫したといふものも見えて居る。是で最初の一巻二巻ばかりが、殊に數多く傳はつて居る理由もよく解るのである。第二の事情としては貸本屋の活躍といふことがあつた。都市の貸本の御得意といふ者にも、幾つと無き種類階級があつて、少し道樂がかうじると新刊の讀み本などを甘がつて、軍書や實録ものゝ寫本へ手を出し、其次には斯ういふ幾分か祕密がかつたものを珍重したのである。或は根岸氏のまだせつせと筆を執つて居る時分から、是が町奉行様の著述だなど、謂つて、餘分の好奇心を動かして居たのかも知れぬ。さうで無くともつい眼前の新聞であるが故に、追々と人氣のある讀物となつて一種の投資事業に筆耕を備うて居たことは確かである。此類の書物には毎度貸本屋の店の判を捺したものを見かけるだけで無く、寫しが又甚だ無責任で、楽しんで讀んで居た人の仕事とは思はれず、中には飛んでもない振假字を附けたものも多い。著者が始めからそんなことをして居た筈は無いのである。一巻に百の話載せるといふのだから、元はこの本は珍らしい大冊であつた。それを程よく五巻にも十巻にも分冊して、一々表紙を附け目録



を分けて掲げたなどは、それが何人の細工であつたかは問はずとも明かなことである。現代の所謂印刷文化と對立して、是はまことに特殊なる一世相であつた。其痕跡として、又百年前のインテリ層の好讀物であつた點に於て、耳袋はそれ自らの價值以外に、なほ一個の存在理由をもつものと、我々は信じて居るのである。

## 二

耳袋が如何に是からの讀者を楽しませ、又教へるであらうかといふことは、我々に取つても大きな興味であるが、その未來の實驗を豫測することは、校訂者の權限を越えるから差控へる。爰にはたゞ技術的なる二三の事實の、或は見逃されるおそれのあるものを、注意して置きたいと思ふ。其一つは日本の説話界の傾向が、この天明寛政といふ頃の少し前から、新たに一つの曲折を示して居たことである。是には市井文學の影響が無論認められるが、同時になほ時世にさういふ需要が既にあつて、招き迎へられたものといふことが出

来る。日本人の話好きは、古今を通じての大きな特色であり、又それが常民の修練に役立つて居たことも昔からであつたらうが、ちやうど此時代に入つて戰國直後の武邊咄が、一通り皆古くさくなり、是に追加せらるべき出來事も少なく、しかも生活の間暇は却つて前よりも多かつた爲に、人は次第に話の種の缺乏を感じ始めて居たのである。今一度中古の御伽物語に、戻つて行くといふことは何としても出來ない。第一に逸話流行期の嚴肅な敘説法に耳馴れて、もはや「あつたさうな」といふ類の、取留めない話し方を歓迎するところが出來なかつたのである。それから今一つ、是は讀書が尊重せられた結果だらうが、以前は幾らもあつた遠い過去の話が、段々と雜談の中からは消えて行つて、いつと無く今日の新聞の記事と近くならうとして居た。乃ち人が寄合つて何か變つた話はござらぬかなどといふやうな場合に、ぼつ／＼と出て來る話題の種類が、既に江戸期の前半とは著しくちがつて居て、しかもまだ我々の時代とも大分共通でない所がある。それをこの耳袋が、或程度までは代表してごく大まかに見積つて、この六百ばかりの説話集の、約半分は事實談



當時は少なくとも名を知られた人たちの逸話である。是だけは在來の言行録の類の趣旨を承繼いたものとも言へるが、何分にも型が小さく、又花やかな表現を含んで居ないので、假に十分に正確であらうとも、今日の所謂史料として利用せられる機會は至つて少なく、全部を綜合して或一つの時代相を感じ知る以外には、もはやゴシップとしての魅力をも持つて居ない。我々はたゞ人間の情偽、もしくは世渡りの技術とも名づくべきものが、都市では既に驚くべき精微の域に達して居て、稀に消え残つた昔風を感嘆する態度が、寧ろ今日の人に近いといふ點に興味をそゝられる。之に反して他の半分の奇事異聞、又は雜説とも名づくべき説話の方は、少なくとも其種と構圖とに於て、可なり昭和の人々の抱へて居るものと變つて居る。是は生活の地平線が高く且つ窄まり、外から來る刺戟のまだ至つて乏しかつた時代としては已むを得ないが、是ほどまでも話を愛し、且つ新鮮味を珍重した知識人が、遊び楽しんで居る花苑としては、如何にも小ぢんまりとし過ぎて居る。つまり日本人の好奇心といふものは、一旦目覺めてからこゝでやゝ不自然に制約せられ、それ

が又他日の奔放なる反動の、原因ともなつて居ららしいのである。説話研究者の立場から見れば、この過渡期の現象にも、隠れたる意義が認められることと思ふ。即ち新たな説話の需要は大いに有つて、まだ供給が是に應じきれなかつたのだから、勢ひ同じ一つの、傳播が遠く弘く、従つて又次々の改造も念入りであつたことは、僅か是ばかりの話集の中にも明かな證據が得られる。たとへば飴賣土平の身元、又は淺草觀世音の御利益によつて、不思議に毒害の災難を遁れた事件などは、筆者も氣が付かずにちやんと二處に出て居て、その話し方に大分の異同がある。努めて恠力亂神を談るまいとした、篤實な老人にすら、なほ此事があつたのである。鈴木白藤の『反古の裏書』などに依ると、此時代には作り話を考案して、世間がまに受けて次から次へ、取傳へて行くのを見て楽しんで居た閑人もあつたといふことだが、さういふのは物ずきの行止まりで、素より眞似も出來ず、又度々は成功したらうとも思へない。それにも拘らず、會て司直の官に在つて、眞偽の判別に長じて居る人の、うそは成るべく載せまいと心掛けて居た筆録の中に、なほ幾つとも無



い昔話が形をかへ、場所人物を設けてさも實際にあつた事のやうに、語り繼がれて居るといふのは面白いことである。話を人生の主要なる一部と見る氣風は今日もなほ續いて居るが、爰には既に新しい話題が充ち満ちて居て、もはや大昔のかたりごとが、姿をやつして入り込む空隙は無くなつて居る。この時代の目に見えぬ變遷を感じ比べさせることが、或は耳袋の將來の役目では無からうかと私は思ふ。

## 三

日本には限らぬことであらうが、説話が近世初期の社交界に於て、割當てられて居た職分は重要なものであつた。其内容の聴く者を裨益したことは別にしても、人は是であるが爲に集まつて共に楽しみ、又互ひに懇親を結ぶことが出来たのである。耳袋の偶然なる手柄は、筆者の克明な注記によつて、大部分は話の出處が明かになつて居ることで、それを見るとほゞその循環して行つた経路が窺はれる。人と話の種類とを照し合せて見たら、必ず

興味ある結果が得られると思ふが、それ迄の時間が我々には無い。とにかくに大名も旗本も、根岸氏と附合ふほどの者は皆何か話をして居り、中には随分の話すき又は話上手と謂つてよいのも何人かある。斯ういふ生れから良い身分の人たちが、大よそは相手の好みを解して、折と場所柄に相應した話を、次から次へと出して來るといふことは、實に大いなる時代の進歩であつた。以前は同朋とか咄の者とかいふ専門の徒があつて、殿と名の付くやうな人は只の聴衆、もしくは笑ひ手でしか無かつたからである。好きこそ物の上手といふ諺もあるが、どうすれば又是だけの話の種を貯へて、人を楽しませることが出来たか、先づ問題になる。耳袋の時代は、此點にかけても亦一つの過渡期であつた。根岸氏の採集はこの同僚先輩との交換以外、別に若干の供給者をもつて居る。其名が頻繁に出て來るのほゞ見當が付くが、第一には永年頼みつけの醫者、是にも小兒科や眼科などの色々の種類がある。さして急患でも無いのに時々御見舞申して、かの七部集の付句にもあるやうに、「呼子鳥とは何を言ふらん」など、「日は暮るれども長話」をして居たことが想像せ



られる。それから次には鍼醫に按摩、多少の音曲を以て人の心を取る者、そこへ旅をしては又江戸へ戻つて来る俳諧師といふものも三四人あつた。何といふ藝も無い武家の隠居或は浪人で居て少しは醫業の心得もあり、占なひも呪なひも心得て居るやうな中年の男も幾人かこの家へ出入して居て、此連中の持つて来たといふ話が、大抵は奇抜で且つやゝ作爲のあるものが多い。定まつた収入になつたらうとも思へないが、悠長な時節だからあちこちと廻つて居る間に、小さな色々の便宜はあつたことと思はれる。多くの世間話が斯うした世間者の手を通じて、弘く運送配給せられて居たことにも歴史があつた。さうして又少なくとも明治の終りまでは、丸々跡を絶つても居なかつた。それをたゞ根岸肥前守の如く、湛念に書留めて置かうとする人が、一人も無くなつたといふだけが大きなちがひである。

耳袋筆者の傳記は、人名辭書にも出て居て詳しく述べる必要が無い。父の代に始めて農村から出て来て、御家人の株を継ぎ、自身の精勵刻苦によつて、榮達して重い官職にも就

いたほどの人が、一方に世俗生活に對する是だけ深い關心と、餘裕とをもつて居たといふことは寔に異數である。殊に驚歎に値するかと思ふのは、佐渡奉行の時は年もまだ四十臺で、職務も比較的閑であり、周圍に話を持つて來さうな人も多かつたらうが、此間に聽いて書留めて置いたかと思ふものは却つて少なく、それから歸つて來て御勘定奉行になつたのが天明七年の五十一歳、續いて町奉行に轉じたのが寛政十年の六十二歳の時であつて、しかも其前後に起つた出來事と稱するものが、此話集の大部分を占めて居ることである。現在の大藏次官や警視總監に、大よそ是に近い趣味が缺けて居るとしても、我々は決して之を恠みはしない。勿論心掛けも全く別ではあつたらうが、第一に時勢がちがつて居たのである。根岸氏が町奉行を退いた年は、續徳川實記を捜して見たが記されて居ないやうであつた。しかし其期間も相當に永かつたと見えて、直接法廷に於て見聞した奇談も幾つか出て居る。誰に讀ませようといふ計畫も無い覺書を、彼は少なくとも死歿の前々年の七十七歳までは止めて居なかつた。さうして多くの閑人の隠居がしたやうに、何でもかでも聽



くだけは皆書いたので無く、若干の取捨選擇と批判とが是に加はつて居る。ちやうど自分は偶然に同じ時代の風聞録の類を、本書を校訂する傍に讀んで見ることが出來たが、或ものは荒誕を悦び又或ものは惡謔に傾いて、愈々この一書が根岸肥前守の設話集であり、單なる時代の反映ではないことを感じたのである。

## 四

終りになほ一つ、自分等が此書によつて經驗した點を報告すると、此時代は談話と文章との距離が、今よりも寧ろ大いに近かつたかと思はれる。素より現代の所謂口語體のやうに、書くものを強ひて日常の物言ひに近づけようとするのはちがふが、それは或は不可能なことではないかと思ふ。少なくとも今日の文言一致は實は語尾だけの改作である。昔の人たちの普通の文體は、會話とは似ないが暗の口言葉、即ち改まつて外部の人たちと、物をいふ時の形とは近かつたのである。是には溯つて行けば久しい歴史がある。京都の綴

紳の日記などいふものは、漢字ばかりを並べてちよつと漢文のやうに見えるが、何か必要があつて委曲を盡さうとすれば、支那文の法則には背いても、めい／＼の思ふ所には忠實であつたから氣をつけて見ればその四角なもの背後に、あの世の中の人の言葉が扱へられる。それが時代の降りと共に、追々に寫實へ近よつて、終に最近の書翰文とはなつて居るのである。手紙の罷在や相成度の類は、無理に女文字を避けようとした手筒なる一便法で、その爲に書禮の教育を困難にした弊はあるが、同じ流儀の者の申合せを以て、漢字で國語を表示しようとした點は、萬葉集などいふ少しも異なる所は無い。それがほゞ江戸期を限りとして通用せぬことになつたのだから、古文の解し難いことは却つて近古のものに於て甚だしいのである。耳袋の筆者は公人であつて、平生この文體に習熟し、又必ずしも漢文や女房文を模倣しようとしなかつた故に、自然にあの時代の通用文を代表して居る。所謂候文は人と往復する際に、此文體に敬語をさし加へたゞけのもので、日記や覺書の自分ばかりの用に供するものは、やたらに御の字と候の字とを挿んだか否かといふより以外



に差別は無かつたことが、偶然に此記録によつて明かにせられたのである。たつた一つの此文體の缺點は、強いて國産の文字を排斥し、見たところ漢文のやうに堅い字ばかりで書かうとした爲に、無理な宛て字やテニヲハの脱落を忍び、特に節用や伊呂波字引の教育を受けた者で無いと、之に由つて互ひの言葉を選ぶことが出来ない點に在るだけで、文章であるが爲に常に言はぬ語を使ひ、素人に呑込めぬ言ひまはしをするなどいふことは、斯ういふ風にすれば丸々必要の無いことであつた。この方面では却つて當世の多くの文章よりも優つて居るのである。しかしさういふうちにも時代の好尚は、少しづつこの老官吏の筆使ひにも影響して居る所はあるが、とにかくに今日の人とは正反對に、口で用ゐる言葉の選擇には細心の注意を拂ひ、それを筆にする場合は率直に之を寫すに止めて居たことが、たしかに此書物の上にはよく例示せられて居るのである。この態度は今からでも参考になるかも知らぬが、我々が之を説くにはもう時期が既に遅い。耳袋の寫本を其まゝに版にしたのでは、もう讀下せない部分がよほど多くなつて居る。杯(ナド)とか通(アツバレ)

とか與風(フト)とかいふ類の用字も、以前は極めて普通のものであつたが、今日はいふルビを要する。送り假字の省略にも、今日の讀者の理解を妨げるものが若干はある。さういふのは致し方が無いから、少しばかりは校訂者の手で附加してある。根岸氏が世を去つてから、まだ僅かに百二十五年にしかならない。他見無用などは誌して居るが、やはり後代の讀者を期待しては居たことであらう。それが元のまゝではもう讀めないやうになつたといふことは、我々にも考へて見なければならぬ問題である。

(昭和十年二月二十七日)

### 横山重編『琉球史料叢書』

琉球國由來記から、大きな感化を受けて居る一人として、一言だけ禮讚の辭を述べる。



文化といふ言葉を、毎日の御題目にして居る今日の社會にも、まだこの書物ほどの熱心と周密なる用意とを以て、自國の文化を省察しようとした者は無いといつてもよい。今でも文化の定義や總括論ばかりに、うき身をやつして居る人が一方には多いのに、こちらではちやんと二百年も前に、そんな名前も知らずに、その内容になるものゝ全部を、ほど見究めて居る人があつたのである。日本の元祿正徳、支那でいふと康熙時代の學問が、之を指導して居たやうに島の人たちは却つて思つて居るだらうが、私などはかういふ民間の小さな生活にまで、個々の發達進歩の跡を尋ねて行かうとするやうな事業に、果して隣國の御手本があつたかどうかを知らない。假に模倣だつたとしても、是はたしかに出藍の成績であつた。

沖繩では貴族・政治家・知識人がすべて首都に住し、文章を書くものも皆中央に集まつて居た。村や離れ島にも名家は多かつたらうが、それは悉く皆被治者であつた。彼等の間だけの尋常の生活、殊に昔を忘れない信仰の感覺などが、微細に叙述せられて居るのは、

同情でなければならぬ。或はめつたに土地を離れない家々の女性が、祭祀の實權を握つて居り、それが又人心を支配して居た爲とも見られるが、とにかく是を公事の主要なる部分と認めて、録して、政廳に保管したといふことは、寔に珍らしい舊思想の調和であつて所謂外國文化の吸収に急であつた國々は、通例は寧ろ古風の價値を輕んじ、又は忘れることをさへ努力して居たのである。

琉球國由來記の編纂が、もしも經世家の遠大なる計畫、未來の學問の要求の豫想からでも無く、また偶然の好みでも無かつたとすれば、之を必須とした理由は島の社會相、わけでも外部と隔絶した地理的状況の中に在つたのである。我々島國民が率先して自分の事として、尋ね究めて見ない限り、この一つの文化史の問題は明かになる望みはない。さうしてその有力なる資料は、漸うのことで今度始めて、我々の利用の圈内に入つて來たのである。

沖繩島の文運は、この四つの書の成つた頃が隆盛期であつた。殊に由來記の編輯には、



全群島の有識者が参加して、比較的短い時日を以て之を爲し遂げて居る。宮古・八重山の例を以て推測するのに最初島々には先づ一段と詳細な記録が出来、それを中央に進達して統括を計つたことは、ちやうど安永年間の仙臺領の村々書上、天保初期の防長の注進案などもよく似て居るが、その取捨選定の用意に至つては、格別の差があつたのみならず、各地の報告も亦充分に豊富且つ活潑なものであつた。其文書は往々にして別に保存せられて居るが、之と比べて見ると、どの部分を探り、どれだけ原筆者の意圖を尊重したかもよくわかる。或は始めから綿密には報告し得なかつた村々もあつたかと思はれるが、大體に係者の述べて傳へようとしたものは、成るべく残さうといふ方針であつたことが察せられる。

ところが是を漢文に書き替へて、琉球國舊記を作る際には、其態度は著しく變つて居る。一つには技術上の障碍もあらうが、一切の祝詞神語を省略し、神の名や威部の名なども無理な漢字を宛てゝ居る。島より外の人々に見せるには、是くらゐでも澤山だと思つたか、

もしくは、斯ういふことは知らせぬ方がよいと考へたか、とにかくに内外二通りの書き分けが、無意識で無しに行はれて居る。漢文が單なる對外の文學であつて、しかも島内にも文字を以て傳へずには居られない故事歴史が、既に集積して居た時代相はよく窺はれ、二者の對照によつて島の人の心理、仲間の結合の如何に緊密で且つ親切であつたかも、興味深く理解せられるのである。探せば本州の方にも此例は見つかることと思ふが、利害も錯綜し材料も煩雜である故、沖繩のやうに手輕には學べない。少なくとも先づ文籍の數少ない島で、その練習をしてかゝることが便利である。

袋中和尙の神道記を覆勘した横山重氏が、次に由來記に着目したことは、ちやうど又私などの順序とも合致する。私はその前に馬琴の弓張月を愛讀して、極度まで好奇心を刺戟せられては居たが、それが神道記の慶長年間の聞書に據つたと知るだけでは、まだ夢の國から還つて來ることが出来なかつた。それがこの由來記をくり返して讀むことによつて僅か二百年前までの現實であつたことを知り得たのみならず、近く大和の同胞の經驗と、今



なほ結んで離れないものゝあることを覺えたのである。この喜悅はたゞ讀書子のみの獨占し得るもので、しかも一生の間にさう頻繁と遭遇し得るやうな幸福では無い。この書世に傳へずんば、恐らく知らずに過ぐる人が多かつたことであらう。

沖繩では近年幾たびか是等古典籍の校訂刊行を企てたことがあるが、それは極めて障碍の多い事業であつた。一二簡易な版式を以て世に出たものはあるが、その頒布は限られて居る。自分たちの兼て切望して居たことは、かうして東京に於て之を出版することであつたが、今までは殆ど其方法が立たなかつたのである。是はたゞ單に支持者を縣外に求め、頒布を容易にするといふやうな物質的な理由からでは無い。

靜かに通讀する人が次々に發見するであらう如く、國が總體として知つて居らねばならぬ事が、此中には數多く念まれて居るのである。近頃の歴史の常例とは反して、是は事件よりも現象を主として居る。或家或人の事蹟功業を説く代りに、個々の集團の遭遇しなければならなかつた、いはゞ運命ともいふべきものを記述した部分が多い。この經驗は代表

的であり、従うて永く民族總體の参考となるべきものである。之を地方史家の手から引繼いで、國の文獻として保管し又利用すべき必要は夙くからあつて、今まではまだ之を省みる人が無かつたのである。故に單なる推奨といふ以上に、自分はこの新たなる事業に感謝するのである。

田邊 泰 共著 『琉球建築』  
巖谷不二雄

沖繩の昔の祭歌オモロの中には、瓦を買ひに大和へ登るといふ有名な一章がある。土を用ゐた部分の少ないことが島の建築の一つの特徴かと思はれるが、木材も必ずしも十分に豊富ではなかつた。今日見るやうな壯麗なる宮殿樓閣を造り上げる爲には、その若干はやはり船に積んで、遙々と運び入れられたらしいのである。全體に出でゝ求めて來た文化で



あつたといふことが出来る。乃ち坐ながら招致した受身の交易とはちがつて、島の技藝には周密なる選擇があり、又必要の最小限度があつた。無くても済むものは前々の方法を踏襲し、島内の智巧によつて改良し補修して居る。この新舊二通りの作品の併存は、可なり適切に離島の生活の自由と拘束の歴史を物語つて居るのである。泉を取圍んで榮えて居る村里は古い。是を神々の恩恵と仰ぎ、且は人生の怡樂の中心として、尋常個々の住屋以上に永續する工作が施されて居る。石に南の海限りの大きな特質がある如く、之を疊み築く技術にも、輸入以前のもものが明かに有つた、それが一部分はなほ殘留して新たな文化とよく調和して居るのは、さながら代々の島民の刻苦忍耐の、積み重ねに對するやうな感じである。本書の採録が都鄙新舊のどの一方にも偏せず、宮も藁屋も總括して、渾然たる一個の生活相を展開して居ることは、奥ゆかしい用意だと私は思ふ。世界の荒海のどの部分を探つて見ても、沖繩だけの經驗と到達、是に伴なふ未來の問題を、もつて居る孤島は二つと無い。世界の人々も夙くから、この現實を知りたがつて居た。我々も是によつて今一

度、詳かに島の生活と藝術との交渉を考察する機會が與へられたのである。

### 館柳灣著『林園月令』

「良書供養」の催しの御蔭で、良書といふものを考へて見る機會を與へられた。供養といふからには生きて働いて居る本でなくともよいのであらう。實際又近頃出たものゝ中から一つや二つの良書を名ざすことは容易なわざではない。

私が最初に供養したいと思ふのは、林園月令二編十六冊である。出版は天保辛卯(二年)、ちやうど私の父の生れた前年に出たもので、それを又私の生れた前年に、但馬で亡くなつた祖父の許から、遺品として私の家に届けられたといふ、珍らしく歴史のよく判つて居る本である。



東京へ出て来てからも始終覚えて居たが、二三度しか古本屋では目に觸れたことが無い。さまで發行部數の少なかつたものとも思はれぬが、初めから賣りさうもない人ばかりの手に傾たれ、しかも本の形が愛玩に適して居た爲に、中味を利用せぬ者までが手放す氣にならず、追々に舊家と共に消耗しつゝあるのであらう。斯ういふ本こそは供養しなければならぬと思ふ。

私の家でも父の存生の間は、此本の置き處は大よそきまつて居た。それからの四十年はずつと土藏の中に在つた。今度この供養をするについて、田舎から取寄せて撫でつ摩りつして見ると、久しい昔の記憶しか浮んで來ない。昔私たちが本と謂つて授けられたのは、どれも是も大きなぼて／＼とした、少しは微びた表紙の陰鬱な色をしたものゝみであつた。さういふ中に在つてたつた一つ、林園月令だけは寸法が今いふ四六判の半分までも無い。それも字引や和漢名數などの小本とはちがつて、きちんと十六冊、茶がかつた白の木綿更紗の帙に入つて、是だけは祖父の特別の好みらしく、帙の内側に一篇の詩を題してあり、

又角製の長い「こはせ」を以て留めてある。たまに手を掛けようとするときつと叱られた。讀めるようになつたら見せてやる。早く大きくなつて讀めるようになれと、母までが傍から言ふのだから、よほど良いことが書いてあるのだらう、と思はずには居られなかつたが實際は悪戯ばかりして居て、あまり私の手が汚れて居たからかも知れぬ。

とにかくに書物をなつかしむといふ習性は、林園月令によつて養はれたと言つてもよい。今でも綺麗な本を見ると、讀まぬ前から先づ心服しようとする。それを警戒する爲に、美装の書を怖れるようにさへなつた。それ程にも私は此書の外形に心酔したのである。近年思ひがけず、少年の日の文稿を發見して、退屈まぎれに讀んで見ると、さても／＼かぶれて居る。ちやうど許されて此本をぼつ／＼と見た頃と、漢文の稽古を始めたのが同時だつたのである。私の生れた家などは庭が僅か五六十坪で、梅とか白桃とか、七八本も栽ゑてあつただけなのに、私の文章には四季の風物を詠歎したやうな文句ばかりむやみに多く、それが夢梁録とか荆楚歲時記とかいふ類の記述と以て居るのは、全くこの本を通しての模



倣であつた。えらい大きな印象を興へられたものだと思ふ。

今から考へて見ると、林園月令は少しも子供などには用の無い、寧ろ現在の自分等の境涯に似つかはしい本であつた。祖父も晩年になつて、生野銀山の川のほとりに閑居し、それから此本を愛玩して居たのであつた。それを記念であり手澤の痕が鮮かな爲に、父が珍重して塵をもすゑまいとして居たのを、私が誤解をして盗むやうにして讀み耽つたのであつた。しかしその結果は今となつては不幸ではない。私が貧家の末成りに生れつゝも、一生餘閑を求めて花の色鳥の歌を愛し、四時の移り變りに敏感で有り得たのも、言はゞ見ぬ世のおぢいさんのおかたみであつた。此頃郊外に少しの草原を圍つて、がまづみ筵やのろもしき落霜紅、もち、なんてん、むらさきしきぶ、かまづかなどの、小さな實のなる小木を多く栽ゑ、幸ひ禁獵地になつてやゝ集まつて來る小鳥を滞在させ、早曉に窓を開いて其聲を聽いて居たりするやうになつたのも、源を問へばこの帙入の小本が、分外に大きな感化を釋い頭に押付けて居たからとも考へられる。やつぱり子供には物めでの心、人が美しいといふものに感

動する癖を、つけて置くのは悪くは無いと思ふ。昨年の秋の或日、孫の一人が庭へ附いて出て走りまはる。おい／＼さうどこでも飛んであるかれては困るよ。この苔の上には夕日が當つて美しいやうに、おぢいさんが丹精して居るのだからねといふと、女の兒なものだからすぐにそこへしやがんで、小さな手を伸ばしてその苔藓を撫でました。さうすれば此兒も今に植物を愛するやうになるだらうと、私はふと昔の林園月令を想ひ起したことがあつた。

一向に自分の事ばかりを述べて本の解題を怠つて居たが、是は越後新潟の學者館柳灣の著作で、自家の園圃の月々の行事豫定を漢文で書き、その前後に支那人の文と詩との、是から聯想せられるものを數多く排列したものである。新潟とはあるが此人は江戸に出て、たしか目白の高臺のあたりに住んで居た。所謂月令は江戸西郊の風土に準據したのであらうが、範を外國に採つて、しかも地味氣候の異同を致へようとしなかつたのは、やはりあの時代の書卷裡の文雅を脱して居ない。その文献にも新渡の唐本をひけらかした嫌ひが少



しはあるが、第二編に引用した顧鐵卿の清嘉錄に至つて、その載する所の風俗、多く我邦と相似たるに心付いたと謂つて居る。もしも此方法が今少しく推し進められたならば、今日の所謂比較民俗學も、存外に早く東洋に夜明けたかも知れぬのだが、編者が老を養ふ風流の文人であり、文が漢語であり時代が又此の如く變化した爲に、遺韻は遠く傳ふことを得なかつたのである。

此書の文字は至つて見ごとな細楷であつて、曾て森鷗外氏が傳を書いた伊澤蘭軒の參校となつて居るが、版下は或は御自身の筆であらう。一紙片面七行十五字、字の大きさは三號活字ほど、是に丁寧な訓點が施してある。こんなにも氣の利いた上品な書物を、以前も作り出すことが出来たのかといふことを感ずる爲にも一度は見えて置いてよい本である。それから進んでは斯ういふ書物を出してもよい時代が、つい一世紀前まではあつたといふこと、是が此頃ではもう發見にならうとしてゐる。

(形成 昭和十五年四月)

## 讀書雜記

### 書物が多過ぎる

讀む可き物を讀み盡されぬ淋しさ

この間北京に滞在中、二時間程暇を得て武英殿の陳列場を、觀に行つた事がある。掠奪を免れた前皇室の寶物場で、この先はどうなるか分らぬが、今では民國が依托せられて管理して居ることになつて居る。事務の人に良い考古學者があると見えて陳列の仕方が悪くない。たゞ驚くのは、一個あつても優に家の名を傳へられる程の美事な七寶なり、青磁なり、銅器なりが製作年代順に分類されて何百となくズラリと列び。優良なる工人が一人で

書物が多過ぎる

二七九



作れば十分一生涯は費る程の珠玉の作り花が、百以上壁に添うて列なつて居る。その間を劔付鐵砲で警衛して居る番兵を見ると、自分は何となく魚屋の猫を聯想せざるを得なかつた。

此日、自分はホテルへ歸つてから興業銀行の小野さんに、こんな話をした事を記憶して居る。「武英殿見物は確かに吾々には有益であつた。恐くは新出來の富豪達のこれからそろそろ骨董でもヒネくらうといふ者には此陳列場を見せる事が、行き止りはこれ迄といふ事を、手つ取り早く理解させて、一種の免疫劑になるだらう」といふやうな事を話した。資力も無い癖に、と、冷笑する人があるかも知れないが、少なくとも自分に取つては、蘆生の夢は醒めたのである。

併し、珠玉珍玩に對する自分の欲は最初から實は淡かつた。幸に山の口から引返したといふ事も、さしたる大事件では無かつた。これに反して所謂文の林では、自分はどうしても浮ばれぬ亡者である。殊にこの頃になつて、しみんと讀む可き物を讀み盡されぬとい

ふ、自覺の淋しさを味はひ初めた。しかも、どうしてもよい程に切り上げて引返す道がなくなつて居るのである。そこで獨り靜かにその原因を考へて見ると、幾つも若い讀書家達の參考にすべき誤謬があつたやうに思はれる。

### 幼かりし日の懐しき思ひ出

書物との因縁は最初から随分深かつた。世の中に目が開いた時は、自分の家は既に澤山の書物の散ばつて居る家であつた。その時代の事を考へると、まづ心に浮ぶのは、明治の初年に専ら流行した、黒や黄色のよく光る表紙の色である。西南戦争の前後に出來た本は一種特別の臭ひがあつた。今日書庫の奥で嗅ぎつける微た楮の纖維が濕つては乾いた、あの嗅ひでもなければ、古本屋の店先でよく感ずる埃の香でも無く、初期の洋紙に一種の印刷インキの浸み入つた餘り快い香では無いが、年代が經つて見ると、懐しい臭ひである。今になつて考へて見ると、あの頃は既に、昔に較べて非常に出版の容易になつてゐた時代



であつたらしい。或商人は銅版の印刷を始めて人氣を惹ひた。活字も年を逐うて氣の利いたものに變つて行つた。袖珍と稱する量の低い複製本がドシ／＼と出たのもこの時代であつた。それを彼の光つた黄や紺の表紙で装釘したものである。全體に鼠色の調子の寛政前後の書物、それよりいま一段昔の黒い調子の書物などに比べて、嫌な色だが確かに新しい感じを與へたに違ひない。幼少な自分等も土用干しの日に、この身ひを嗅いでボンヤリと學問は斯ういふ臭ひのものゝやうに感じて居たのであつた。

小學校の子供等が讀本より他持たないのが如何にも卑しく見えて、その度毎に、自宅の土用干の黄色い臭い本を思出して居つたから、多分分らぬなりにいろ／＼な本を開けて見て居たのであらう。何度と無く、人から本の好きな兒と云はれた事を記憶して居て、何を見たのか一つも覚えてゐないのは滑稽ではないか。

斯ういふ際にも、やはり惡戯をする餘裕はあつたと見えて、小さい家に居て弟共と盛に闘つた。そこで、親達が大に困つて明治十八年頃、半年程近村の友人の家に自分を預けた

が、幸か不幸かその家といふのは郷里では有名な藏書家であつた。家の背後に、八疊二間の隠居所があつて自分を愛して呉れた、肥滿つたお媼さんがその中に居り、その二階は悉く書物であつた。

若くて死んだお媼さんの配遇者が、中井竹山の門人で、珍しい讀書家で、藏書の數が四萬近くもあつたらう。人の手に不自由をせぬ富豪であるから非常によく整頓して居る。目錄を見ては見當も附かなかつたが、獨りで二階に上つて本箱の間を歩いて居ると、半日でも一日でも、出られぬやうな氣がした。

こゝでも、何を讀んだか記憶して居ないが、今頃に残つて居るのは、やはり何處の少年でも氣の惹かれた讀み本、小説類であつた。隨筆といふ物の何であるかも此頃初めて知つて、自分の雜書道樂は斯くして十一の年から始まつたのである。

### 兄を心配させ小説類の濫讀

書物が多過ぎる



十三の時に、兄を頼つて下總の國までやつて來た。こゝでも偶然、兄の借りて居た家主が醫者で藏書が多かつた。この家の媼さんは郷里の恩人とは異つて喧ましい人であつたが、孫を欺したり、その外種々な手段を講じて、兎に角、この土藏の本は、讀み度いと思つただけは讀んで了つた。そして悪戯をするより外時間の潰しやうも無くて退屈してゐる矢先、丁度隣家の主人が大怪我をして不具になり、本を讀むより外暮しやうが無い爲め、東京の友人から種々な新刊物を送らせて見てゐたら、そこへ遊びに行つてゐる間に國民の友や、硯友社の人々の作る雑誌などに接したのであつた。

今日と異つて、少年が小説類を讀む事は餘程忌はしい事に考へられて居た。故に、二番目の兄などが大に心配して幸便のある毎に、歌集や、國學者の隨筆などを澤山送つて來て小説さへ讀まなければまだいくらでも貸してやるといふ傳言などもあつたが、結局、それも讀みこれも讀みで、最も悪い濫讀の癖は腹の底迄しみ込んで了つた。

それから若干の年數を経て後『何の爲に本を讀むか』を考へて見た時代もあつた。併し

それは大分濫讀の爲に時間を浪費した後の事で、云はゞ神經衰弱に罹つて居たのであらうか、自分は獨りでつくづく、讀書には指導者が必要な事を感じ初めた。

また、讀書と記憶といふ關係をも考へて見た事がある。これも、記憶力が衰へた後の現象だつたかも知れぬが、兎に角、昔から名家の一屬性の如く見做されて居た博覽強記といふ事は、殆無用なものだと考へ出した。當ても無く、片端しから記憶して行かねばならぬやうでは讀書は最も苦しい牢獄である。同時にまた、讀んで記憶して居らぬ位なら讀まずともよかつたといふ本もいくらもある事を悟つた。参考書の拾ひ讀み又は搜索は、非常に巧拙のあるものである事を知つて、讀書術といふやうなものを考へずに、牧場の馬の如く矢鱈に木に手を附けた事を後悔した事もある。或時にはまた、流水の少し宛物を沈澱させて行くやうな部分が十分靈魂の滋養になるのであると感じて、出来るだけ多くの本を靜かに讀まねばならぬと考へ直した事もあつた。併し、結局東奔西走して居る内に日が暮れるだらうといふ懸念が強く強く起つたので、何の方面へでも自分の讀書慾が片寄つて呉れば



いゝと念じて居た。その中に年が経つて趣味も屢々變化したが多くの場合には迷つて中途から戻つて來たかたちであつた。

處が不思議な事が一つ起つた。少年の頃から好きであつた旅行と讀書とが、或時フツと結び付いたやうな時があつた。江戸時代の隠れたる地方學者が心血を絞つて蒐集して置いた昔の記事が、旅行する度に面白くなるやうに感ぜられた。それを助けて呉れたのが陸地測量部の五萬分の一の地圖である。自分はこれに依つて、色鉛筆をステッキにして暇さへあれば地圖旅行をして居た。

一方には又、折角讀書の方針が附いても今程履刻の盛んでない十年前には、如何に書店をせびつても、歩み度い道が歩めぬのが普通であつたが、第二の幸福には、自分の奉職してゐた内閣の文庫には、内務省の地理局で採集した昔の地誌類が澤山あつて、此方面ならば、極めて勞少なく自分の傾いた趣味の道を進む事が出來たのである。

### 讀書の目的を限定する必要

ところが、八年前に内閣の記録課長が缺員になつて、柳田なら本が好きだから喜んで働くだらうといふ評定で、自分があの文庫の主任に推薦せられた。丁度和田倉門内の古い書庫から、大手門内の新築の書庫へ引越をする時節で、それと同時に、目錄や配列の整理をしなければならなかつた爲に、僅かな人を使つて、自分は最も忙しい讀書をやつた。『本を早く見る練習』はその頃初めてやつて見たが、昔からこれも學者の一特長の如く傳へられて居る、『五行並び下る』といふやうな事は、練習さへすれば強ち難事ではない事がわかつた。洋書は同じやうに目に映じて閉口だが、これも西洋人にはその技能がよく發達して居るやうだ。自分は雜書道樂の時間潰しをして來たお蔭に、斯ういふ仕事に對してあまり骨が折れるといふ感じは起さなかつた。

全體に道樂學問である爲に、所謂勉強といふものは少しもする必要がなかつた。たゞ汗



牛充棟に出會して一層深く考へた事は、讀書は早くから目的を限定しなければならぬといふ事である。警保局の檢閲官の如き職務柄なら格別、又一部の青年のその如く、煙草や菓子同然の慰安術なら格別、苟くも第一義を以て本を讀む者が、今のやうな時節に手當り次第の書籍を取上げて行けば、贏ち得る所は疲勞のみであらう。勿論、四十前後になつてこの感を抱く者は、決して自分のみであるまいが、出来る事なら未だ間に合ふ間にこれから讀書しやうとする人達に、この經驗を傳へて置き度いものである。

だが、讀書の方面を限定する一つの弊害は、碌でも無い著述慾の起る事である。既に吾も苦しんで來た書物の大波濤に、更に數勺の水を加へて後の青年を苦しめる事であらう。これは餘程警戒せぬと自他の爲に大きな損害である。

人は屢々纒かばかり他人より多く知つてゐる事を發表し度がるものである。若しくは、他人よりより多く誤つて居る部分をも發表したがるものである。そして、長い間比較的新奇なる知識を、徒らに土の底に携へて行く事を悲しんで居る人々が、この印刷術の容易な

る時勢に遭遇したのであるから堪られない。少なくとも自分だけでは、さういふ亡靈の間に入るまいと思つて、今日までは警戒して來たつもりである。

### 内容の分らぬ氣取つた標題

自分のやうに興味で讀書するものは、年を取つても存外記憶には難儀をせぬものだが、それにも係らず實は讀んだ書物の抜き書きをやつて居る。これは短い年月に多くの書物を讀む爲の一つの方法で、また大部の物から入用な點を利用するのにも必要な事である。勿論、他人には全然無用かも知れぬ。これは長い航海中に地圖や時計を出して見るやうなもので、云はゞ自分の生活を稍賑やかにするだけの手段かも知れぬ。自分はそれが後世完成した書物と誤られる事を懸念して、最初から離れぬのカードに筆寫して置くのである。その中からよく熟した物を少しばかり本にして出すのだから、これ迄の學者のやうに手前勝手な迷惑は掛けないつもりである。



斯うして考へて見ると、どうしても書物が多過ぎると思ふ。昔の學者も、梨棗に災ひすなどと云つて居るが、實は今日の印刷機械の災の方がそれに數百千倍して居る。しかも、東洋の諸國に於ては文字を尊敬する古い迷信が今猶殘存して居て、如何なる囁語でも活字になると、蹴飛ばされぬ。これは一つ、焚書調査會でも作つて貰はなければならぬ。更に今一つ日本の爲に損なことは書物の標題である。西洋の本には昔へ行く程正確に、書物の内容を表す標題が扉に印してあるに反して、日本では半分以上も讀んで見なければ何が書いてあるか分らぬ標題が多いのに、不得要領にして且つ氣の利いた書名を掲げて内容の愚劣を蔽はんとしてゐるのが多い。

國書解題といふ書物は誤謬もあるかも知れないが、この點では世間に利益を與へて居る。

人生は短くして書物甚だ多し

だが望むらくは、この上内容に立入つて、書物の異同重複を注意し、且つ、目的別の細

かな索引を作つて少しでも後世の讀書家の勞力を節約させ度いと思ふ。元來知識の分類は、時代の水平面より一步進んだ頭腦が入用である。莫大な經費と歲月とを掛けた、大部の古事類苑が存外學問をする人に役立たぬのも、この弱點からである。廣文庫に至つては、尋常無識の富家翁をして張膽瞪目せしむるに足るのみである。書籍の索引は更に必要と思ふが、これを今日の篤學者の勞力に期待するのは餘りに殘酷である。彼等も亦此世に生れた甲斐には、何か一つ仕事をせねばならぬ。索引の如き樂しみの無い事實は公費を以て俸給を拂つた人にやらせるより外無からうと思ふ。自分の差當り最も必要を感じて居る索引は、讀むのに一番骨の折れる中古以來の日記、記録の部類別である。群書索引の如きは至つて散漫なもので、殆ど何人をして利用せしめやうとしたものか見當が付かぬ。

吾々は如何にも不幸な時代に生れた。朝鮮からは何人も讀まなかつた寫本類が追々出て來る。支那の書物も、新しい寫本類でこれから讀直されねばならぬ。西洋の書物はあの通りで、心當りの目録を見て居るだけでも若い者の根氣が要る。一方社會からは學問の有用



だの無用だのといふ、無慈悲な議論が起つて来る。そこへ持つて来て、形や色彩で人の心を迷はすやうな新しい書物が、買つて見なければ分るものか、といふやうな小面の憎い顔つきをして店先に列んで居る、其分量がまた莫大である。

昔のやうな單純な心持で書物に對ふのは、殆ど生命を縮める手段である。縮められなくても人の生涯は短い。警戒して進まなければならぬと思ふ。近頃二三の學者の説に依れば、今日の製紙法は未だ幼稚で、圖書館内の大部分の書籍は五六十年の後には鼠色の泥になつて了ふと云ふ事である。散々苦い經驗を嘗めた吾々の耳には、これは寧ろ好音である。これを悲しむのは紙魚ばかりであらう。

(大正六年十一月)

### 書物を愛する道

岩波文庫をはじめ、今日弘く行はれて居る數々の「文庫もの」に對して、我々古い人間の包みきれない不満は、あまりにも外國の著作が多過ぎるといふ一點である。西洋は國の境がもとはさうはつきりとして居らず、學者も書物もよく旅行をして居て、最初から國際共有のものが多かつたが、それでさへ文庫の目録には國に各自の片よりがある。タウフニツツのやうな特殊の目的をもつて、原文のまゝ出して居るものは別として、私たちの見て居るものはレクラムでもゲツシエンでもベイヨオでもキャツセルでも、又は此頃の幾つかの英米の叢書類でも、日本のやうに外國ものばかりを六割七割までも出して居るものは一つも無いやうだ。出て来る翻譯を抑へるやうに、もつと少しく出すやうにと、言ふのなら無理かも知れぬが、是ほど外國物を出すことが出来る位ならば、責めては其同量くらゐは日本の本を、並べて出すことにしてはどうかと、思はずには居られないのである。この現象は誰にでも一目に見えることで、しかも此比例數から、後世子孫又は外國の識者が、我々の時代を批判するであらうことは、文化事業の片端にでも携はつて居る者には、相應に



心苦しいことである。

是に對する辯疏も、決して耳を傾けるに足らぬものでは無い。第一に出したくても適當なものがないのだから致し方が無い。第二に讀者が此方を求め、現に盛んに賣れるのだから出す。この二つの理由は共に今日に於ては十分成立する。自分もそれを尤もだと思へばこそ、改めて深く考へて見ようとするので、もしさういふ事情も無いのに、斯んなことをする者があつたら、そいつはもう話にならないのである。世の中の傾向といふものには、事情を聽いて尤もでないものなどは一つでも有りはしない。それを一々諒として異議を挾まずに居たら、先づ新らしい社會は生れる望みが無からうではないか。

○

本が日本に有り餘るほど出て居ることは、種々なる方面から立證し得られるが、斯く申す自分なども、最初には欲しいものゝ集めきれぬことを歎き、中頃は選擇の標準の示され

ぬを憾みとし、今は又讀まねばならぬものゝ讀み盡されぬことを悲しんで居る。つまりは一生涯、書物の豊富に苦しめられ通したのである。斯ういふ中に於て、國內には適當なるものが得られないといふことは、そも／＼何を意味するであらうか。それを先づ靜かに考へて見る必要があるやうである。我々が現代と呼んで居る期間の新著作は、誰が見ても決して數が足りないのではない。寧ろ多過ぎるが爲に選擇に均衡を期し難く、個々の發行者としては緣故ある著者に偏するの嫌ひあり、殊に店で散々賣り廻らしたものを、廢物利用するか如く評せられるのも口惜しいので、出来るだけそれを避けようとするのも致し方が無い。問題はそれよりも以前の、古人の著作をどうしようかである。乏しい／＼と私たちが騒ぐのも其部分である。

文庫は名の示す如く、本來は許す限りの數量を藏して置いて、隨時に何度でも取出して讀めるやうにすべきものと自分などは解して居る。今は何時でも買へる故に、言はゞ書店に預けてあるやうなものである。是に現代の新著が入り難いのは當然であらう。著作權の



期間とは關係無く、又一日も早く廉價版の出るのを待つて居る者が多からうとも、書物の「文庫」に編入してよいものかどうかを決するには、どうしても若干の年月を要する。寧ろ早急にそれを取上げることが、やがて再び抹殺する結果をさへ生じたのである。しかもその前代の文献が、日本は又決して少ない國では無かつた。帝國圖書館などはもう三十四年も前に、兩手でも持てない程の目錄を發行して居た。この中からでさへも僅かは見つけばかりしか文庫に採るものが無く、出しても求める人があるかどうかの見込が立たぬといふことは、果して説明無しに何人にも理解し得ることであらうか。さうして又その實際の理由を、今でもわかるやうに説明し得る人が有るだらうか。それが私などには甚だしく氣になるのである。

○

本を読むといふことは、大抵の場合には冒險である。それだから又冒險の魅力がある。

教科書法令の如く一讀を強ひらるゝものは僅かであると共に、廣告宣傳文以外に其内容の有益を、始から保證してくれる者は無く、實際又各人の今の境涯に、ちやうど適合するか否かは自分でしかきめられず、讀んで見なければ結局はそれも確かでない。此頃は人氣が本を讀ませ、澤山賣れるといふことが一つの指導標になつて居るらしいが、是とても我々をそれに近よらせるだけで、愈々讀まうか讀ままいかはやはりめい／＼が判斷する。其方法が少し無造作に過ぎることは事家である。しかし兎も角も一應は手に取つて形をながめそれから標題を讀む。もしくは此順序を逆にする人もある。さうしてロシア語とかサンスクリットとか、よく／＼自分に縁の無い文字で書いてない限り、大よそどんな事が出て居るのかの見當を付ける爲に、二三枚をめくつて見る位は誰でもする。きれいな繪があつたり艶めかしい會話が目につくと、思はず釣り込まれてもつと讀んで見たくなるのとちやうど正反對に、一方にはたゞ何と無く面倒くささうで、一向に好奇心が動かず、所謂敬して遠ざけたくなるコンディションといふものも幾つかある。私たちは戯れに一方を枝折戸、こ



の方を垣根と呼んで居るが、古書には我邦では殊にこの垣根が高いのである。是と書物の價值とは固より關係が無い。現に十本ばかりは其中から聳え立つて、通路に枝を垂れ、又は遙々と梢の色をめでられて居る名木もあるのだが、その下草の姿とり／＼なるものは、もう覗いて見ることさへ六つかしくなつた。さしもに咲き榮えたいにしへの文の苑も、まはりの垣根が枳殻では話にならない。古い園だと自慢はして居るものゝ、古人を友とする方法は斷ち切れようとして居る。しかも其原因は本そのもの、もしくは之を世に残さうとする人の用意の差に在るので、たとへば文庫がどのやうに誠實であらうとも、其努力だけでは乗り越えることが望まれない。我々讀者も共々に深く考へて見なければならぬ問題である。

○

僅か半世紀の前と今とを比べて見ても、書物の外形がびつくりする程も變つて居る。最

初に氣がつくのはその標題で、近頃は追々と中味が想像し得られるやうな名を付けるに反して、もとはそれを見たゞけでは何が書いてあるのか判らなかつた。従つて讀まぬうちから本の名を、聽いて覚えて置く必要があり、學徒はやたらに本の名ばかりを、口にしながら人間のやうに悪評もせられたのである。是とはちやうど裏表に、昔の本は外形装禎などから、大よそ性質を想像させてくれた。同じく「問はず語り」とか「よしなし草」とか何齋漫録とか何々隨筆とか題してあらうとも、本が大ぶりで表紙がくすんで居れば儒者などの著作で、やゝ固くろしい事が書いてあり、薄手の表紙の畫でも書いたやうな小本なら風雅人の見るものゝその他八文字屋本の横形から、赤本黄表紙蒔藁本に至るまで、少しく好きになれば遠方からでも狙ひが付けられた。私たちがいかい御世話になつた美濃版の丹表紙、それから明治初年の大型の黄色な紙表紙など、何れもそれ／＼の意匠で人の聯想を養はうとして居た。此方面では日本の出版工藝も中々進んで居た。其約束は近年までまだ残つて居て、私などは地方の都市の書店を覗いて、書棚の色彩からほゞ其土地の文運を察知



したものであつた。ところが所謂馬糞紙の箱に入れる風が始まつて、菊版四六等々の大きさ以外に、外から本の性質を見當づける途が先づ無くなり、次で文庫が始まつてどれも是も川原の小石の如く、手に取つて細字の標題を讀まなければならぬやうになつた。さうして其序を以てほんの二三頁だけはぐつて讀むので、本屋の店先は非常に植木店や半襟小切れ類を賣る店先と近い光景を呈するやうになり、口繪が重んぜられ、著者は又標題のつけ方に大きな苦心を拂ふやうになつた。必ずしも西洋の眞似では無いが、立見で見當のつくものだけが多く買はれ、書名を記憶する代りに著者の名ばかりがよく通用して、人氣は一段と怖ろしいものになつたのである。心の養ひになるかならぬかと、そんな事をして確かめられるものでないと思ふが、其議論は今はいらない方がよい。とにかくは是ほど數多い日本の古書が、僅か三十種か四十種以外、誰にも省みられなくなつた原因は特色の没却、即ち文庫それ自身の外形の單調化に、在つたといふことまでは考へて見る必要がある。

○

それから今一つ、古人が大きな損をして居る點は、文體の急激な變化といふことにも在る。是は或は普通教育の革命と謂つてもよいかと思ふが、以前の讀書人の素養は漢學に據つて居た。小さな頃から色々の字の用ゐ方に馴れて居る。従つて同じ書き下し文を書くにしても、つい六つかしく文字も使へば、送りがなも概して儉約する。何の氣なしに故事や熟語を引用する。それを學校でほんの少ししか漢文を教へられなかつた人に、讀んでもらはうとするのだから若干の故障にはなる。言葉は實際には百年前と今と、さう大きな變化はして居ない。従うて耳で讀むのを聽いて居れば大抵はわかるものでも、書き方が古風な爲に親しみを持ってないことは、ちやうど行書草書がまじると寫本はもとより、親や祖父母の手紙までが讀めなくなるのと同じである。所謂口語體が獎勵せられ出してから、この障壁は一段と高くなつた。殊に書名によつて内容を察し、又はたゞ數頁をばら／＼と拾ひ讀



みして、面白からうかどうかを決定する風が盛んになつては、古書は年月と共に益々人望になつて行くことも已むを得ない。書物が唯一の今と過去との交通方法であることを知る人が、是を何とかしなければならぬと考へてくれるのを待つばかりである。

○  
今までに知られて居る仲介手段としては、註を付け講釋をして聽かすといふことより他には無かつた。註釋は決して素通しの硝子のやうなもので無いことは、甲乙幾つもの註が互ひにちがつて居るのを見てもよく判り、それに又其力の及ぶ範圍が限られて居る。古書の我々に役立つものゝ數を少なくした原因は寧ろ註釋に在ると謂つてもよい位で、何か世俗的理由がある本ばかりに、やたらにそれをする故に他の部面が御留守になり、しかも仕事に勿體を付けようとして譽め立てゝばかり居るから、讀者は却つて自由なる取捨判別を妨げる上に、更に一つの弊は註の無いものに出て行くことを臆病にする。註に導かれて

本を読む癖を棄てないと、独自の發明を期することは出来ぬのである。文庫の目的は少なくとも豊富なる讀みものを提供して、任意に其中からめいゝの好みと入用に合するものを、見つけ又は擇ひ出させるに在るのだから、片端から註釋を付けて置くわけにも行くまいし、假に其様な手數な事をして置いても、自分が讀み得たやうな氣はせぬであらう。

○  
崩した文字で書いた昔の寫本を、楷書の活字になほして印刷すると同じく、古文の書きなほしといふことも或程度までは必要かと思ふ。たとへば送りがなを數を加へ、振りがなが見苦しいとならば、そこだけはかな文字に改め、又は返り點の付くやうな文字はまつすぐにかくとかいふ類の、ほんの僅かな工作を施せば、一見した所非常に親しみやすく、且つ讀んで見てもすつと樂になる。西洋でも古い綴り字法だけは皆改めて居る。それも元の姿のままのを見たいといふ人には、別に保存の方法があつて、多數の讀書人は皆この讀み



よい方の本を供せられて居るのである。日本のやうな綴り方の色々な國で、文庫が其整理の任に當らぬのは誤りである。それだから古書の大多數が、いはゆる高閣に束ねられてしまふのである。日本外史を書き下し文に改め、漢籍を和字文にするといふことは岩波でも始めて居る。是なども譯でも註釋でもない。漢文の讀み方には久しく定まつた様式があつて、今ならばまだ人が忘れきつては居ないのだから、是も現代語の一部と見てよいのである。

○

それからもう一つ、我々が古書を疎遠にする理由は、統一の欠けたものが多いこと、何が目的で此本を世に残したのかを、はつきりと把へられないものが多いことである。是は古今の著者氣質の大きな差で、現代は何なり問題にする讀者といふものゝ想定を、昔の人たちはごく漠然としかして居ない。中には自分の備忘録に過ぎぬと謂つたり、人に見せる

積りは無いなど、信じられないやうな事を謂つた人さへあつた。次には一般に著述の期間が、今の人よりは長すぎた。三十年も四十年もぼつ／＼と書きため、或は後になつて改定し、しかも其中途で既に寫し傳へられて居るものも多い。分量では徳富蘇峯の國民史、中里介山の大菩薩峠の如きものはまだ無かつたが、何しろ久しい歳月を掛けて居るから態度もかはつて居る。書いてあることも色々になつて居る。辛抱をして私たちは始から終まで見通すことにはして居るが、全部すべて棄てられぬといふものは實は少なく、しかも飛び／＼には皆珍らしく又感が深いのである。話を集めた古事談とか著聞集とか砂石集とかいふ類ですら、片端から誰にでも讀ませてよいといふものばかりでない。まして近代人の隨筆日記などの、一生に二種二種しか残さぬといふ大著などは、單に大きすぎる爲に版にならず、いつまでも寫本で傳はつてやがて亡びるものが幾らあるか知れない。其中には又他では求められぬ大切な知識が、偶然ならず保存せられてあることを見るのである。古書を粗末にし又は少しも利用せぬといふ悪い傾向が、斯ういふ事情に基づいて居るとすれば



それを救済し得るものも「文庫」の外には無い。それ故に自分などは、單なる完形保存の事業の他に、別に古書を現代人と繋ぎ付ける略本といふものゝ流布を希望し、それを却つて文庫の主要なる任務だとも思つて居る。勿論略本は一方に廣本の確保と、十分に特色を發揮し得るだけの、責任ある抄録を條件とする。さうして又是によつて良書を知り、新たに未知の分野を拓くもので無ければならない。本の名前ばかり際限も無く教へられて、中味はちつとも讀んで居ないといふ人ばかり多い世の中に、折角歓迎せられた「文庫」といふものが、今の姿ではまだ本當に働いて居るとは言はれぬであらう。

### 古典の發掘

古典が單なる古代の典籍、たとへば雜然たる今日の雜著が、たゞ腐朽を免れて三百年、

乃至五七百年を持ちこたへて居たら、それだけでもう古典になれると、いふ様なもので無いことはわかつて居る。そんなら何人が是を決めるのかといふと問題であり、又幾らでも議論が戦はされてよい問題でもあると思ふが、結局は世俗、即ち多數の人が寄つてたかつて有名にしたものが、日本ではこの重々しい地位を取得することになるのであらう。もとより此言葉を用ひ始めた心持ちも區々であり、中には覆刻業者の拾ひ出したものが皆古典であつたり、さうかと思ふと他の一方には、紀記と萬葉の他にはもう古典は無いかの如く信じ切つて居た人も可なりあつたが、是からは多分雙方より歩み寄つて、少なくとも名を知り、一度は讀んで見ないと氣になるやうな古書の範圍が、追々にきまつて行くのであらう。無やみに擴げて見たところで讀めもせず、覺えもせず、たゞ精力の浪費に歸するが、さりとて折角いろ／＼の好い仕事は傳はつて居るのに、變に片隅にかたまつて、満足してしまふのもそれをつまらない。大抵は自然に程よい所に落付くものと思ふが、やはり自由な新しい感覺をもつた人たちが、『古典發掘』見たやうな瀨踏みをしてくれることが、



世の中の爲にはうれしい一つの力なのである。

言ふまでも無いことだが、我々は古典の制約なんか少しも受けては居ない。稀には舌打ちして途中で罷めるやうな損はあつても、それは覺悟の上で讀みたいものは何でも讀む。たゞ世間にはその様な氣樂な人ばかりは居らぬ爲に、獨りで勝手次第な判断をしても居られず、又その言葉に耳を傾けて聽く人もあるのである。今度の新著などは、發掘といふのも可笑しいほど、誰でも知つて居る有りふれた古典の陳列だが、その發掘の手法の斬新さにかけては、登呂の遺跡に優るとも劣りはしない。何よりも前に私の想像に泛ぶのは、もしも是等の文藝のそれ／＼の作者が、出て來て斯ういふ批評解説を聽いて居るものとしたら、さぞかし奇妙な顔をしたらうといふことである。よその國々の文學變遷は全く知らないが、日本では文人は少なくとも人の爲に、又は世の中の爲に物を書いて居た。讀者多數の言はうとして言ひ得ないことを、代つて表現しようとした努力は有つたかも知れぬが、作者個人の心の中の動き、獨自の見解とか態度とかいふものを、掲げ示さなければ文藝で

無いといふやうなことを、誰からも言はれなかつたのみならず、第一にはゆる思想を持つといふことを、義務づけられて居たやうな様子も無い。それといふのが文學は一つの技藝であり、詞華といふのはたゞ國語を有効に、最も美しく又感深く使ひこなすことであつて、それより以上のさう澤山のを、彼等からは要求しなかつたからだと思ふ。それが不當であつたり不利益であつたりすることは、どこまでも論じてよろしいがそれは是からの話、其爲に急に中世以前の文學が、哲學になることは先づ無からうと思つて居る。

しかし斯ういふものを通して、もう少し我々は過ぎし世を知らなければならぬ。わざと傳へようとはしないまでも、無意識に内に在るものを表白して居ないとは限らぬ。それを粗末にしてはならぬといふことは確かに言へる。しかし其爲にはたつた一つ作品をあんまり見詰め過ぎるのは考へものだと思ふ。時代は比較によらないと本とうはよく判らず、古くなるほどその比較が六つかしい。久米邦武さんといふ人は五十年前の新人で、毎度上代史を説くのに、出雲族の外交策とか、大和政府の財政方針とかいふ文字を使つて我



我をびつくりさせたが、何と言つたところで神代は神代である。然らば是からさう心得ましようといふ者も無く、依前として世間では紀記を神典と視ることにして居たのである。古典を我々の學問に利用すること、單なる鑑賞とは二つ別々の仕事なのではあるまいか。さうして今回の發掘者たちには、どうやら久米流にこの分堺を看過して、世俗に對する折角の親切を、割引して居る人が有るやうである。怒るといけないから小さな聲でいふが、どうかと思ふ點が私には二つある。近世以前の文學には受賣と燒直し、又はだまつて翻譯して居るものが幾らもあり、詞華の技藝としては、うまければそれも賞讃せられて居た。それを私小説同然の創作と心得て、むきになつて批判したるをかしいことになるだらう。第二には兵亂水火の長い歳月を重ねて、残つて居るものにも運不運がある。時が古かつたり或小數の人が譽めたりした爲に、無やみに有名になつて感心せずには居られぬといふものも、實は相應にまじつて居る。今更削除運動も始められぬとすれば、古典は元來さういふものだ、考へてかゝる必要があつたのではないか。漱石先生が死後三十年、まだ商標

にしてゞも遺兒を富ましめる力をもつといふことは、考へて見れば文運の貧しさであり、同時に又人氣の片よりやすい國柄を示して居る。之を突き破らぬと本ものゝ自由は得にくく、古典はたま／＼國民の文學能力の、頃合ひの練習場でもあつたと思ふ。だから新らしい發掘者たちも、たゞ自分の我意を通さうといふだけで無しに、少しは後に來る大いなる世俗の爲に、共々に物を考へて見ようといふ氣持ちになつてほしかつた。日本の書物は幾百萬、多數の凡書悪書がかさぶたの様になつて、我々の感覺を斷ち切つて居ることも事實だが、中には文體や字體の爲、又は漢文の力の急激な衰微の爲に、ちよつとは近づけないものがどの位有るか知れない。今と昔との縁の薄いことは、恐らくは他國には例が無からう。古典といふやうな言葉には囚はれない若い學者が、せめては西洋の古典に對する十分の一の熱心をもつてくれたら、まだまだどれほどのものが見付かつて來るかかわからぬのである。それ故にこの發掘といふ言葉に對しては、自分はどこ迄も深い興味を寄せて居る。



穴一  
綽名  
海鹿島  
浅草觀世音  
秋田打ち  
赤川菊村  
アイ

索引

ア

索

二六  
二五  
二四  
二三  
二二  
二一

引

安倍晴明  
雨乞  
網代場  
飴賣土平  
アヤゴ  
「安南記」  
按摩

イ

三一三

二六  
二五  
二四  
二三  
二二  
二一



遊戯  
イゴモリ  
伊澤蘭軒  
石打ち  
移住者  
一茶  
泉  
稻まるき  
家々の歴史  
家サノボリ  
印旛沼開發

白唄

ウ

一三  
二二  
二六  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇

歌の文句  
優曇華  
寫し物の流行  
エ  
「江刺郡昔話」  
「江戸雀」  
江戸の文化  
榎木の枝  
オ  
送り假字  
大サノボリ  
大島寶水

三  
二六  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇

おしよらね  
御伽物語  
オトビ  
鬼の首  
オハケサン  
御果し  
オヒネリ  
大田蜀山  
オモロ  
親方衆  
大和田建樹  
御師

カ  
索引

一四  
一八  
一九  
二〇  
二一  
二二  
二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇

外來音樂  
カギの木  
樂器  
カクマ  
カクラ  
隠れたる文通  
貸本屋  
霞の碑  
カツチャグ  
カド  
門附  
川漁の方法  
川口孫次郎  
川湊

三  
二六  
二八  
二九  
三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇



索引

貝原益軒	三五	「郷土會記錄」	三二六
「甲申旅日記」	三三	郷土玩具	二五
替歌	一三	郷土誌	一四、一四、一四
鎌倉燒	一八六	郷土教育	一四
漢學	一〇、一〇、一〇	郷土研究	一四、一四、一六
漢文	三三、三九、三一	「京都古習志」	六
		京都の風俗	一六
		曲譜	一三
		「嬉遊笑覽」	一七
		玉蘭齋貞秀	二八
		「共古隨筆」	二八
		擬挽	二五
			三
			一五

キ・キ

「聽耳草紙」	一七
「岐蘇路之記」	三三
北原白秋	二八
狐女房	二五
忌の日	三
郷土	一五

ク・ク

録	六	ケンチナシ	三二
括り猿	六	言語地理學	三
蜘蛛舞	二〇		
黑板勝美	一〇		
黒川道佑	一〇		
黒鷲	一五		
「廣文庫」	二九		
廣本	三〇		
「群書索引」	二九		
郡制廢止	一五		

コ・コ

「荆楚歲時記」	三五	口語體	三三、三九
潔齋物忌	一五	「孔子家語」	八
		公祭	八
		小唄	一八
		五月節供	二四
		五月二十八日	二四
		胡鬼板 (胡鬼子)	二二
		五行説	一〇
		御家人	三〇
		小作人	一七
			三二七

ケ・ケ

索引



索引

「古事類苑」 三五  
 古書覆刻者 三三  
 五線譜 一〇  
 こたん大王 (巨旦將來) 一〇  
 子供の生活 一〇  
 小苗打 一〇  
 コノデガシハ 一〇  
 固有信仰 一〇  
 「古琉球」 一〇  
 金毘羅角力 一〇  
 サ・ザ  
 歳時習俗 一〇  
 賽の遊び 一〇

サ・ザ

祭禮 三五  
 酒ばやし 三三  
 索引の問題 一〇  
 櫻田勝徳 一〇  
 佐々木喜善 一〇  
 佐藤信淵 一〇  
 佐藤族 一〇  
 藏書家 一〇  
 候文 一〇  
 山民の心理 一〇  
 シ・ジ  
 私祭 一〇  
 市井文學 一〇

シ・ジ

祭禮 三五  
 酒ばやし 三三  
 索引の問題 一〇  
 櫻田勝徳 一〇  
 佐々木喜善 一〇  
 佐藤信淵 一〇  
 佐藤族 一〇  
 藏書家 一〇  
 候文 一〇  
 山民の心理 一〇  
 シ・ジ  
 私祭 一〇  
 市井文學 一〇

シホデコ 一六  
 事實談 一六  
 しだれ柳 一六  
 習俗の改訂 一六  
 「島」 一六  
 島々の習俗 一六  
 島の生活 一六  
 社会史研究 一六  
 社会人類學 一六  
 障子貼り 一六  
 精進した信徒 一六  
 商人地主 一六  
 蛇形の神 一六  
 狩獵團體 一六  
 索引

呪法 一六  
 巡見使 一六  
 「諸國行囊抄」 一六  
 「常總軍記」 一六  
 白鳥省吾 一六  
 「人國記」 一六  
 神職 一六  
 神社行政 一六  
 眞宗 一六  
 神道記 一六  
 人文地理學 一六  
 「壬戌紀行」 一六  
 ス・ズ

ス・ズ

呪法 一六  
 巡見使 一六  
 「諸國行囊抄」 一六  
 「常總軍記」 一六  
 白鳥省吾 一六  
 「人國記」 一六  
 神職 一六  
 神社行政 一六  
 眞宗 一六  
 神道記 一六  
 人文地理學 一六  
 「壬戌紀行」 一六  
 ス・ズ



「水虎考略」

水災の記録

鈴木白藤

水利

菅江眞澄

隨筆

セ

「聖書民俗考」

西南戦争

赤水學派

關屋貞三郎

世間話

世間を看る眼

三六

三五

三五

一八三

一六三、一八〇

天

七

六一

三五

一六

五、五、三〇

三六

節供

説話

説話界の傾向

説話研究者

ソ

即興歌詞

園市

ソネリタン

蘇民將來

タ・ダ

田植歌

袋中和尙

一〇三

三五

三五

三五

一三

一

一

一

一三〇、一七五

一六

三三、三六

三〇

六

六

六

天

一七

一七

一七

一七

一七

一七

一七

一七

チ・チ

地侍

地主

地方學者

茶

長者話

索引

長者になる法則

著者氣質

町村誌

女性の生活

地理學

ツ

「月の出羽路」

「筑紫紀行」

つく舞

綴り字法

津村正恭

テ・テ

一七

一〇四

一四

三五

三九

一八

三〇

三〇

三〇

三三



索引

出口延佳

傳記

傳承者

田地持添

ト・ド

「東國戰記」

頭人

銅版

東北人

東北研究

東北農業

東北問題

「東西遊記」

六

查

三〇、三六

一六

二四

九

二六

一七

一〇

四

二四、三三

「東西遊雜記」

道祿神

動物生態

頭屋の標幟

「土佐日記」

都市人の心持

年の豊凶

讀書術

隣の寢太郎

トビ

ナ

中井竹山

長久保赤水

三二二

三

九

一六

七

三

一〇

二五

三三

九

二五

二六

「長崎行役日記」

夏越の祓

「奈良隨筆」

ニ

錦長者の話

荷繩はづし

乳穂積み

日本の農村

日本の文藝

日本民俗學

「日本靈異記」

女房文

三九

二二

七

一六

一五

一四

一九

三〇、三三、三六

二五

三三

ネ

年中行事

ネフスキイ(ニコライ)

年譜

一〇、一〇八、一一〇、一八五

一三

二八

農具

農民の心理

祝詞神語

ハ・バ

俳借師

バイコフ

三〇

三二二

索引



索引

方言	一〇	話上手	二〇
方言の研究	二	咄の者	二〇
方言區域説	三	原田敏明	二〇
方言の比較	三	張子の達磨	二〇
方言の類似	二二	鉦匡	二〇
方言文學	三	晴の口言葉	二〇
齒固めの餅	一九	蕃族慣習調査會	二〇
ハギイ(ハゴ)	二二		
羽子板遊び	二〇		
榛の木	七		
ハタハタ	一八	日記	二二
八初	二六	比較民族學	二二
初山の日	一〇	彼岸の團子	二二
話言葉	一〇	「備後風土記」	二二
		「飛騨の鳥」	二二

フ・ブ

一つ家の生活	二〇	武邊咄	二五
「日次紀事」	一五	舞踊	二五
火防せの力	一七	振りメンコ	二五
備忘録	三四	古川古松軒	二五
「漂流海上図」	三三	古田月船	二五
漂流者	三三	文化史の研究	二五
漂流者の婚姻	三三	文化史の問題	二五
		文化人類學	二五
		文化複合	二五
		文庫もの	二五
フク子	六		
藤井清水	一四		
藤原相之助	一六		
普通教育	一四、一七	幣串の制式	二五
武塔天神	一〇	幣めぐり	二五

索引



左右両頁露光量調整、重複撮影

索引

方言  
方言の研究  
方言區域説  
方言の比較  
方言の類似  
方言文學  
齒固めの餅  
ハギイ(ハチ)  
羽子板遊び  
榛の木  
ハタハタ  
八初  
初山の日  
話言葉

一〇  
一一  
一二  
一三  
一四  
一五  
一六  
一七  
一八  
一九  
二〇  
二一  
二二  
二三  
二四  
二五  
二六  
二七  
二八  
二九  
三〇

話上手  
咄の者  
原田敏明  
張子の達磨  
鏡屋  
晴の口言葉  
蕃族慣習調査會  
日忌  
比較民族學  
彼岸の團子  
「備後風土記」  
「飛騨の鳥」

三二四

三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇

フ・ブ

一つ家の生活  
「日次紀事」  
火防せの力  
備忘録  
「漂流海上凶」  
漂流者  
漂流者の婚姻  
フク子  
藤井清水  
藤原相之助  
普通教育  
武塔天神  
索引

三〇  
三一  
三二  
三三  
三四  
三五  
三六  
三七  
三八  
三九  
四〇  
四一  
四二  
四三  
四四  
四五  
四六  
四七  
四八  
四九  
五〇

武邊咄  
舞踊  
振りメンコ  
古川古松軒  
古田月船  
文化史の研究  
文化史の問題  
文化人類學  
文化複合  
文庫もの  
幣串の制式  
幣めぐり

三二五

五一  
五二  
五三  
五四  
五五  
五六  
五七  
五八  
五九  
六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇







索引

メダマの餅

一〇

メンコ

一〇

メントク

一〇

モ

木糖子

一〇、一一

餅酒の板

一〇

餅花

一〇、一〇、一〇

物よし

一〇

森鷗外

一〇

「森の王」

一〇

ヤ

屋敷林

一〇

索引

山路

一〇

山と日本人

一〇

山中共古

一〇

ヤラヒ

一〇

ヤラヒゴ(ヤンゴ)

一〇

ユ

「雪の古道」

一〇

ヨ

四谷丸太

一〇

ヨテナメ

一〇

ラ

ライマン

一〇

「老嫗夜譚」

一〇

蠟燭

一〇

リ

陸地測量部

一〇

略本

一〇

龍王の信仰

一〇

「琉球國旧記」

一〇

「琉球國由來記」

一〇

流行歌

一〇

流行の模倣

一〇

「俚語集」

一〇

索引

歴史教育

一〇、一一

歴史考古學

一〇

歴史の説き方

一〇

六月朔日

一〇

「爐邊叢書」

一〇

ワカゼ

一〇

「和漢三才圖會」

一〇

「和漢名數」

一〇

ワカゼ

一〇

「和漢名數」

一〇

三二九



渡し場

九

女の學問

三

キ

女の修養

四

異種族の生活誌

三〇〇

女の特長

五

醫者

三五九、三六〇

亥子

二六

井上頼壽

六

威部の名

三六

ヲ

小笠原長保

三三

小川東秀

三四

沖繩文庫

三〇六

男のツハリ

三六

刊行の言葉

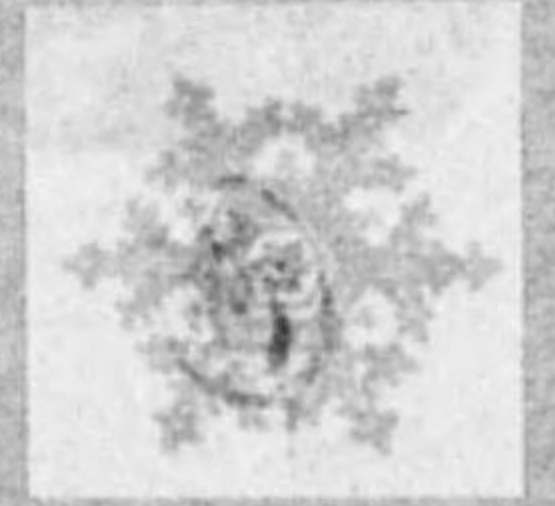
こゝに柳田國男先生著作集を世に送るにあつて一言刊行の趣旨を述べて置く。日本に民俗學の研究が興つて以來四十年、先生はこの學問の樹立者指導者として或は著述に或は講演に、又直接門下の教導に寧日なき有様であつた。加ふるに民俗探訪の足跡は全國に遍く、山間の僻村洋上の離島に至るまでその見聞の精涉誠に掌を指すが如くである。民俗學の研究に志す者はもとより本邦文化史に思ひを寄する者、先づ先生の業績をたづねるは今日の常識である。然るに先生の論文著作はその數頗る多く而も容易に入手し難い。我等これを遺憾とし先生に乞うてその代表作をまとめて一望の下に公けにせんとす。幸ひに先生にはこの計畫を賛せられ此處に刊行の運びとなつたことを喜びとする。本著作集に取扱はれたる問題は廣範にして多岐、盡く在來史學の空白として残されし分野に研究の歩を進め獨創の見を立てられたものである。衣食住、村落と家、冠婚葬祭、國民信仰、年中行事、婦人の生活口承文藝、國語問題などいづれもその豊富なる資料を全國に互る比較研究の下に來たし、ことさらに斷定を避けてこれを將來の研究に俟たれてゐる。我が日本の歴史が新らしき展開を告げんとするに際して我々は先づ常民の歴史を尋ねその將來の動向を決定せねばならない。學問の自由と率直なる批判の許されたる今日凡ゆる研究が精確なる事實の認識を出發點とせねばならない。この意味に於て本著作集の持つ意義は多言を要せざる處である。江湖の精讀を希望する次第である。たゞ現下出版界の惡條件は到底これを我々の理想とする形式の下に出版するを許さず、可能なる限りの努力を以て満足するの外なきことである。讀者これを諒とせられたい。終りに臨み本計畫に援助を惜まざりし出版社各位に對し深甚の謝意を表するものである。(昭和二十二年三月 柳田國男先生著作集刊行會)



第一冊	山の人生	初版	五十圓
第二冊	地名の研究	再版	百二十圓
第三冊	信州隨筆	再版	二百五十圓
第四冊	時代ト農政	初版	百二十圓
第五冊	木思石語	初版	百八十圓
第六冊	北國紀行	初版	二百三十圓
第七冊	女性と民間傳承	初版	二百四十圓
第八冊	退讀書歷	初版	二百七十圓
第九冊	老讀書歷	初版	二百七十圓
第十冊	神を助けた話	近刊	
第十一冊	新語論		
第十二冊	方言覺書		

柳田國男先生著作集

柳田國男先生著作集 第九冊  
老讀書歷



昭和二十五年一月十日發行  
定價 二百七十圓

著者 柳田國男  
發行者 梅山 紘  
發行所 實業之日本社  
東京都中央區銀座西一ノ三  
電話京橋五二二一—五  
振替東京三二六番  
印刷所 大日本印刷株式會社  
表紙 小倉印刷所  
製本所 小原製本所



第一冊	山の人生	初版	五十圓
第二冊	地名の研究	再版	百二十圓
第三冊	信州隨筆	再版	二百五十圓
第四冊	時代ト農政	初版	百二十圓
第五冊	木思石語	初版	百八十圓
第六冊	北國紀行	初版	二百三十圓
第七冊	女性と民間傳承	初版	二百四十圓
第八冊	退讀書歷	初版	二百七十圓
第九冊	老讀書歷	初版	二百七十圓
第十冊	神を助けた話	近刊	
第十一冊	新語論		
第十二冊	方言覺書		

柳田國男先生著作集

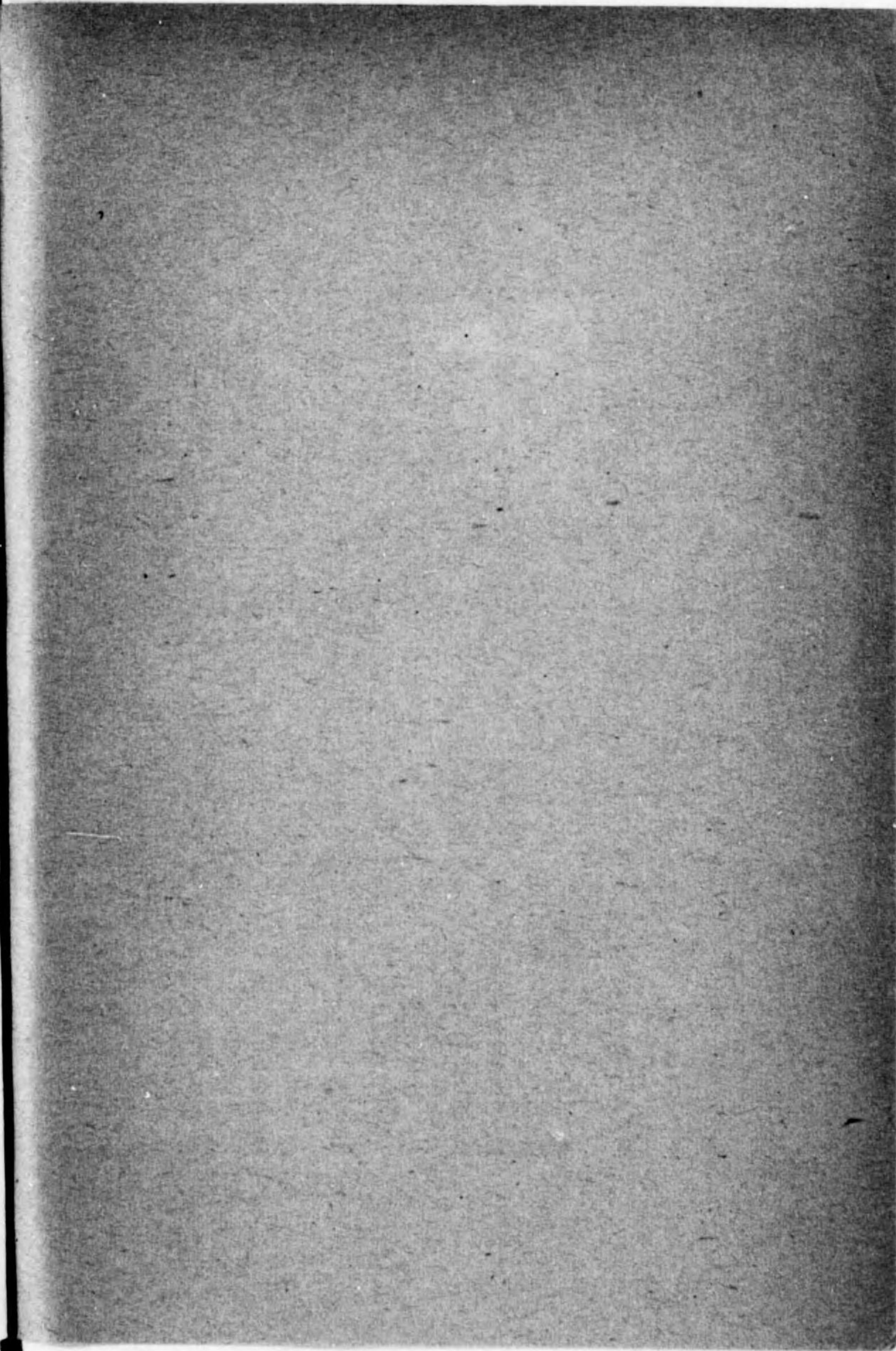
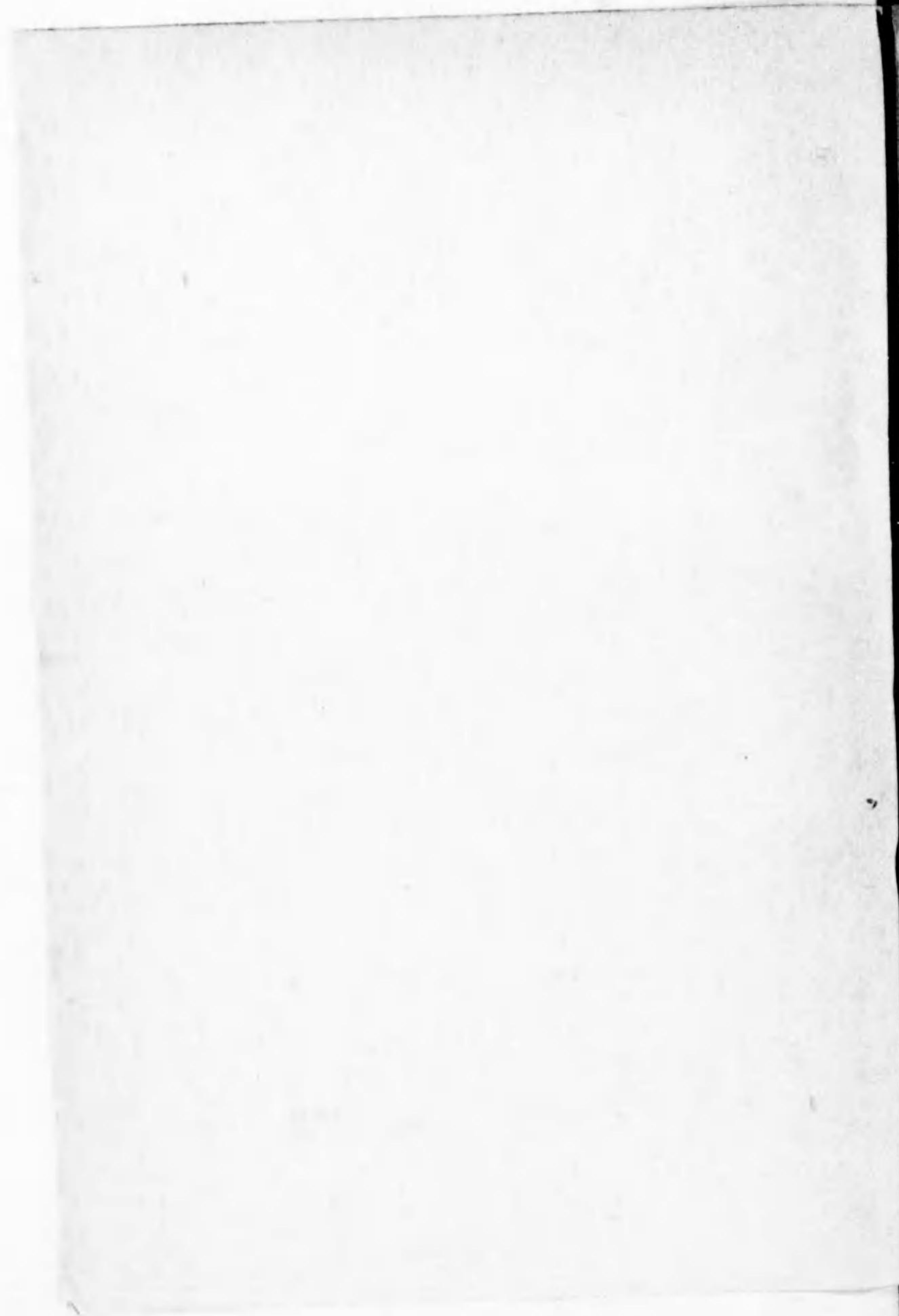
柳田國男先生著作集 第九冊  
老讀書歷



昭和二十五年一月十日發行  
定價 二百七十圓

著者 柳田國男  
發行者 梅山 糺  
發行所 實業之日本社  
東京都中央區銀座西一ノ三  
電話京橋五二二一—五  
振替東京三二六番  
印刷所 大日本印刷株式會社  
表紙 小倉印刷所  
製本所 小原製本所







25. 2. 15.



終

